

2019 年度  
関西福祉科学大学大学院  
社会福祉学研究科  
心理臨床学専攻

修士論文題目

発達障害における感覚異常と二次障害との関係  
性に関する臨床心理学的考察

指導教員（ 櫻井 秀雄 ）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 11820001 氏名 井手 優里菜

## I.はじめに

2013年4月にDSM-5に改訂され、DSM-IVで使用されていた広汎性発達障害、アスペルガー症候群の名称等が使われなくなり、ASDに変更された。DSM-IVまでは、自閉症を含む広汎性発達障害等の特徴として、Wingの提唱した『ウィングの三つ組み』が有名である。Wingの三つ組みとして、①社会性の障害②コミュニケーションの障害③想像力の障害とこだわり行動・常同行動があげられる。DSM-5を用いて自閉症スペクトラムを評価して診断する際には、『ウィングの三つ組み』から、①社会的コミュニケーションおよび相互的関係性における持続的障害②興味関心の限定および反復的なこだわり行動・常同行動、感覚異常（感覚過敏あるいは感覚鈍麻性）の2つの行動領域の異常の有無や重症度によって評価される方向へと変更された。ASDの診断基準の細目に感覚異常が含まれたことで、一般的にも感覚の問題が着目されるようになった（森戸ら,2017）。感覚異常とは、聴覚や視覚などの五感や運動覚、温痛覚などの感覚が他者とは異なる感覚特性のことである。感覚異常を把握するためのアセスメント・ツールとして、作業療法士であるWinnie Dunn博士によってSensory Profileが開発され、これによると感覚異常は、低登録や感覚探求、感覚過敏や感覚回避の4象限に分けて考えることができる。低登録とは、感覚鈍麻のことであり、感覚を感じる閾値が高いために多くの刺激がないと感覚を感じない状態であり、感覚探求も低登録と同様に閾値が高く、感覚を得るために自分で刺激を与え感覚を得ている状態のことである。感覚過敏とは、感覚を感じる閾値が低いため、周囲の人間が気にしないような少しの刺激にも敏感に反応してしまう状態のことであり、感覚回避とは感覚過敏と同様に閾値が低いことから、少しの刺激でも敏感に感じ取ってしまい不快に感じてしまうのを避けるために、耳を塞ぐなどして感覚を回避する状態のことである。

近年、ASD児・者における感覚特性についての研究がなされるようになり、また当事者の体験談が多数出版され、感覚や運動能力が引き起こす困り感に関する知見が充実し始めた。例えば、（綾屋・熊谷,2008）においてASD当事者の綾屋が、空腹時に複数の身体感覚や感情が生じるため、空腹感を捉えることが困難であると語っており、発達障害児・者の持つ身体的な問題の詳細が広く知られつつある。しかし、このように知見の蓄積が進む中でも、現状では体系的な支援方法が確立しておらず、研究も発展途上であると考えられる。また、感覚の異常には、感覚異常を持つ本人が周囲の理解を得られないという特徴もある。理由として、当事者が経験している感覚を他者が共感することは難しく、時に本人でさえも自分の感覚によって生じる生活上の負担や困難が、他者とは異なる感覚によるものだと自覚していないことがあげられる。それゆえに感覚の問題が原因でとった行動が、周囲からは“わがまま”や“忍耐不足”だと捉えられる（井手,2018）とされている。また、感覚に伴う苦痛を周囲に伝達できないASD児がほとんどであり、“何に反応して泣くのか分からない”“何を嫌がるのか分からない”といったように、感覚異常、特に感覚過敏がある場合、嫌いな音、嫌いな形、嫌いな匂い、嫌いな触覚などのために、生活に大きな影響を受け、その子どもは生き

にくくなり、保護者にとっても育てにくく、家族との愛着形成も難しくすることが示されている（森戸ら,2017）。ASD 当事者である、Donna Williams はいくつかの感覚の異常を有しており、『Nobody Nowhere』の中で自身の感覚特性について記述している。例えば、低登録に関しては、聴覚に問題はなくても、周囲の人が呼びかける声が届いていなかったり、傷ができていても、おむつかぶれのヒリヒリした状態であっても刺激に気付きにくかったとされている。また、感覚探求に関しては、Williams は足を動かすことが好きで、その結果椅子に座ることが困難であることが示された。感覚過敏に関しては、音が苦手であり、抱きしめられるなどの通常は苦痛に感じないような刺激にも敏感に反応し苦痛を感じてしまうことが示されている。Williams の体験記から ASD 児の感覚特性は日常的に多大な影響を及ぼすことが理解できる。発達障害は「見えない障害」ゆえに子ども自身や親の養育に責任が求められ、他の知的障害や身体障害等と比べて、必要なサポートが得られにくい点を示している。また、障害が見えにくいだけでなく、ASD の人々が自分の困っていることに気付けないように、気付いても上手に隠してしまうことも指摘している（重橋,2012）。メンタルヘルスとの関係においては、特に感覚過敏を有している場合、それが当事者のメンタルヘルスに対してネガティブな影響を及ぼし得ることも指摘されている（信吉・高岡・矢野,2015）。感覚過敏は抑うつとの相関（Tsuji et al.2009）や不安との相関（福島,2014）が指摘されている。また、教室内のざわつきに耐えられず出て行く（浅井・杉山,2007）や制服の詰襟や非常ベルの音で不登校になるなど（浅井・杉山,2007：岩永,2013）、感覚過敏が社会的不適応に繋がる事例も報告されている。発達障害においては、以前から不安との相関が報告されてきたが（White et al 2009;Gillot et al .2014）、その相関に感覚過敏が影響していることが予想される（信吉・高岡・矢野、2015）。

感覚異常を抱えている人々は Williams 同様、高閾値である低登録や感覚探求、低閾値である感覚過敏や感覚回避など、複数の感覚特性を同時に体験している場合もあり、過敏-過鈍が同時に存在することもある（図 1）。複数の感覚の異常を包括的に把握することは、ASD や関連の障害のある人の生活の質を向上させるためにも重要である。客観的に感覚異常があることが明らかになることは、自己理解の場であり、支援のための出発点でもあるとされている（辻井,2018）。

神経学的閾値	行動反応	
	受動的行動	能動的行動
高閾値（馴化）	低登録	感覚探求
低閾値（鋭敏化）	感覚過敏	感覚回避

図.1 Dunn の 4 象限モデル

ASD における感覚異常について、以下のような研究がなされている。

1) .自閉症スペクトラム障害児の感覚特性に着目した家族支援

ASD 児の感覚特性に焦点を当て、ASD の人々が幼少期に感じていた感覚特性の内容について、Dunn の 4 象限モデルを用いて分類を行ったものである。その結果から、家族が ASD 児の感覚特性を理解する手がかりが示されている。ASD 児の家族支援として、①ASD 児の感覚特性に伴う苦痛の早期発見の方法、②ASD 児の家族と関係者の情報共有の方法、③社会への啓発活動について提言されている。また、本人が自身の感覚の特性を把握できていない場合や、周囲に“わがまま”だと認識され、本人の感覚特性による苦しみを理解してもらえない場合など、感覚異常をもつ ASD 児の状態や、彼らを取り巻く環境についても報告されている。

2) .感覚過敏に困り感を持つ発達障害児・者への支援の現状と課題

感覚過敏を、聴覚過敏、触覚過敏、嗅覚過敏、視覚過敏、固有感覚・前庭感覚に分けて、それぞれの過敏の症状や困り感について報告されている。また、感覚過敏であるがゆえに起こる二次障害についても報告されており、感覚過敏に対する行動療法などの支援方法も記述されている。自身の感覚と他者の感覚とを測ることができないため、自身の感覚過敏を“あたりまえ”と捉えてしまい、本人が感覚の過敏を把握することや、周囲の人間が感覚過敏を理解することが難しいとされている。加えて、感覚過敏が当事者のメンタルヘルスにネガティブな影響を与えている可能性も示唆されている。

3) .レジリエンスの視点から自閉症スペクトラム特性を持つ学生の支援を考える

ASD 特性を持つ大学生を対象に行われたレジリエンスの研究である。ASD 者は何らかの精神障害を合併しやすいとされており、学生の ASD 者は 54%の割合でうつ病を併発し、年齢が高くなるにつれて精神疾患や問題行動を合併しやすいと記述されている。また、友人のサポートがない学生にトラブルが有意に多く、真面目な学生や趣味を持たない学生に不適応問題が有意に多かったと報告されている。ASD 学生の社会適応を促進し、QOL を維持するためには、併存症などの二次障害の予防が重要であるとし、レジリエンス因子を高めていくことで、不適応や併存症の予防に役立つのではないかとされている。レジリエンスを強化する支援としては、サポート環境（特に友人）を整えること、趣味や自分に合ったサークルやバイトをすすめることが大切であると述べられている。

以上のように、ASD 児・者における感覚異常やレジリエンスに関する研究はいくつかなされている。しかし、感覚異常の現状や、彼らを取り巻く周囲の環境に関する研究はなされてはいても、感覚異常と二次障害やストレスがどういった関係にあるのかという研究は見られない。さらに、当事者が感じている感覚の特性と、養育者が把握している子どもの感覚特性との違いに関する研究も乏しい。

既に指摘したように、本人が自身の感覚の特性を把握できていない場合、周囲から誤解されてしまう。そして、本人の感覚特性による苦しみが周囲に理解されない状態が続くと、本人はストレスを感じ、二次障害へと結びつく可能性があるのではないだろうか。また、周囲の人間が本人の感覚特性を把握できているにも関わらず、本人が自身の感覚特性を把握していない場合も、本人はストレスを感じ、それにより二次障害が引き起こされる可能性も否定できない。

## II 目的

そこで本研究では、SP 感覚プロファイルと青年・成人感覚プロファイル AASP をもとに、ASD 児・者の感覚の特性を捉えることを第 1 の目的とする。また、ASD 児・者の感覚特性と、二次障害やストレスとの関係や、ASD 児・者の感覚特性と周囲の理解と、ASD 本人の理解がいかに関係に自尊感情に影響を与えているのかを明らかにすることを第 2 の目的とする。また、ASD 児・者の感覚特性の背景にある、養育者の養育態度などにも注目する。さらに、当該 ASD 者に対し、その感覚特性を取り入れたグループ活動（感覚特性についての自己・他者理解プログラム）を提供することで、その自己・他者理解が自尊感情に与える影響を検討することを本研究の第 3 の目的とする。

## III 方法

### 1. 調査対象者

「A 県高機能自閉症児者の会」に所属する会員のうち、関西福祉科学大学櫻井研究室で提供されている仲間作りを目的としたグループ支援活動の、サンデプラス（12 名）・アスコミスリム（10 名）に参加する児童及び青年 22 名及び、その保護者を対象とした。会員の平均年齢は  $18.095 \pm 3.5903$  歳である。

### 2. A 県高機能自閉症児者の会に提供されているグループ支援活動の目的

ASD 者の特性であるこだわりを媒介として、他と繋がっていくこと（類似性認知）を目的としたグループ支援である。

### 3. 調査実施期間

X 年 Y 月に 1 回目の検査及び心理教育、Z 月に 2 回目の心理教育と検査を実施した。

### 4. A 県高機能自閉症児・者の会に提供されているグループ支援活動の内容

#### (1) サンデプラス及びアスコミスリムのスケジュール

どちらのグループも月に1回の頻度で、同じ日に活動を行った。

表

表.1 X年度 7月 プログラム (例)

時間	プログラム名	所要時間
13:00~13:30	集合	30分
13:30~13:40	あいさつ	10分
13:40~15:30	クイズ Who am I・写真でポン	50分
15:30~15:45	おやつ	15分
15:45~17:20	感覚の魔術師 Ver1	35分
17:20~17:30	解散	10分

## (2) プログラム内容と流れ

### ①あいさつ・説明 (10分)

子どもさんが来られたら、ネームプレートをとって貰い、後ろの机に荷物を置くように促す。司会が開始のあいさつ、出欠の確認、1日の流れ、注意事項の説明を行う。

### ②クイズ Who am I・写真でポン (50分)

子ども達のこだわりを用いて作成したクイズを行う。

### ③おやつ (15分)

場面の転換を図り、子ども達が落ち着けるように時間を取っている。

### ④感覚の魔術師 Ver1 (35分)

子ども達の感覚特性の把握のために、感覚特性に関するアンケートを配布し、答えて貰う。また、感覚特性についての心理教育も行う。

## 5. 調査内容

本研究では、対象児とその親にアンケートを実施した。なお、欠損値は統計処理リストから除外した関係上、分析ごとに総数の違いが生じている。

## (1) 調査対象者に実施した質問紙・尺度・検査

### ①本人用 AQ（若林・東條 2004）

自記式になっており、5 つの下位尺度（「社会的スキル」「注意の切り替え」「細部への注意」「コミュニケーション」「想像力」）の各 10 問ずつから構成されており、これらの下位尺度の得点と、AQ 得点が算出される。すでに日本語版の信頼性・妥当性が報告されており、日本におけるカットオフ値は 33 点である。

### ②AASP 青年・成人感覚プロフィール

Catana E.Brown と Winnie Dunn によって開発された質問紙であり、日本語版の監修は、辻井正次が行っている。「いつも」「しばしば」「ときどき」「まれに」「しない」の 5 件方で回答を求める。感覚刺激への反応傾向を 4 つの象限から評価する。評価対象者が自分で質問票の項目に回答し、検査者がスコアを集計する。質問票は、「味覚・嗅覚」「動き」「視覚」「触覚」「活動レベル」「聴覚」の 6 つのセクションに分けられており、合計 60 項目ある。評価は「低登録」「感覚探求」「感覚過敏」「感覚回避」の 4 象限について年齢群別のカットスコアを用いて 5 段階で評価を行い、神経学的閾値（高閾値～低閾値）や、行動反応・自己調整として（受動的～能動的）の相互作用からも評価を行う。質問項目が理解可能な 11 歳以上の対象者による自己記入からは、信頼性の高いデータが得られるはずであるが、ASD 特性のある対象者の場合、自分がどのように感じているのかはもちろん、自分自身の振る舞いについて客観的に判断するのは難しいと考えられる。そのため、対象者の認知機能レベルに関わらず、11 歳以上の対象者に AASP と SP の両方を使用する方が、より詳細なデータを得ることができる。

### ③被受容感・被拒絶感尺度

杉山・坂本（2006）により作成された、被受容感・被拒絶感尺度を用いる。被受容感は 13 項目、被拒絶感は 9 項目の合計 22 項目からなり、各項目について「まったくあてはまらない」～「よくあてはまる」の 5 件法で回答を求める。

### ④自尊感情尺度

Rosenberg（1965）が作成した、尺度の桜井（2000）による邦訳版である。全 10 項目からなり、各項目について「いいえ」～「はい」の 4 件法で回答を求める。

### ⑤ストレス尺度

東山書房から出版された『ストレスマネジメント・テキスト』に記載されている質問

紙を用いる。半年間のストレス状況について知ることが可能である。全 15 項目からなり、「ほとんどない」～「いつもある」の 5 件法で回答を求める。

## (2) 養育者に対して実施した質問紙・尺度

### ① フェイスシート

子どもの姓名、性別、年齢、兄弟の有無、活動継続年数、養育者がお子さんについて心配しているところ（参加前・参加後）、お子さんの最も良いところ（参加前・参加後）などを尋ねた。

### ② 児童用 AQ

若林・東條（2004）が作成した児童用 AQ を用いる。これは AQ とは異なり、自記式ではなく、親などの養育者による他者評定式になっている。AQ と同じく、5 つの下位尺度（「社会的スキル」「注意の切換え」「細部への注意」「コミュニケーション」「想像力」）の各 10 問ずつから構成されており、これらの下位尺度の得点と AQ 得点が算出される。すでに日本語版の信頼性・妥当性が報告されており、日本におけるカットオフ値は 20 点である。

### ③ SP 感覚プロフィール

1999 年に作業療法士である、Winnie Dunn 博士によって開発された、感覚異常を把握するためのアセスメント・ツールである。日本語版は、辻井正次によって監修され、保護者（またはそれに準ずるもの）による回答で評価される。子どもに日常的に接する保護者が、各行動が見られる頻度（「いつも」「しばしば」「ときどき」「まれに」「しない」）を質問票に回答する。質問票は、「聴覚」「視覚」「触覚」「口腔感覚」など幅広い感覚に関する 125 項目から成る。評価に関しては、「低登録」「感覚探求」「感覚過敏」「感覚回避」の 4 象限に分けて考え、さらに神経学的閾値（高閾値～低閾値）や、行動反応・自己調整として（受動的～能動的）の相互作用によっても評価する。

### ④ Child Behavior Check List

Child Behavior Check List (Achenbach 1991;以下 CBCL と略す)の日本語版を使用した。CBCL は養育者の評価により、子どもの問題行動を測定する評価尺度であり、2～3 歳児版と 4～18 歳児版がある。本研究では、その中で 4～18 歳児版の CBCL を使用する。ひきこもり、身体的訴え、不安抑うつ、社会性の問題、思考の問題、攻撃行動と非行的行動の下位尺度および、内向尺度と外向尺度の 2 つの下位尺度からなる。最近の子どもの様子について、「あてはまらない」～「たいへんよくあてはまる」の 3 件法で回答を求め、それぞれ 0～2 点を与え得点化する。



#### ⑤ADHD-RS

DSM-IVを基に、ADHD の診断のために開発され、ADHD の的確な診断・スクリーニング・重症度評価に役立つものである。奇数番の項目が「不注意」、偶数番の項目が「多動・衝動性」を反映した質問である。それぞれの領域ごとに得点を合計し判定する。「ない、もしくはほとんどない」0点～「非常にしばしばある」3点の4件法で回答を求める。スコアが0または1点であれば症状はなく、2または3点であれば、症状が存在すると解釈される。

#### ⑥CDC (Child Dissociative Checklist)

Putnam (1985) による、多重人格障害の子どもの頃の予見因子に関する研究をベースにしている。観察者による報告と言う形式を採用しており、対象者となる子どもを過去12カ月にわたって見てきた大人、例えば両親、養父母、教師などが記入することになっている。質問項目への回答は、「まったくそのとおりである」を2点、「そういうときがときどき/いくぶんある」を1点、「まったくあてはまらない」を0点とした3件法で回答を求めた。現在は、20項目で構成されており、(1) 解離性健忘、(2) 態度、情報、知識、能力および行動の年齢相応性の急激な変化、(3) 自発的なトランス状態、(4) 幻覚、(5) アイデンティティーの変容、(6) 攻撃的行動および性的行動という6つのタイプの解離性行動を評価できるようになっている。スコアが12点を越えた場合、解離性精神病理の存在を示唆すると考えられる。

#### ⑦TK 式診断的新親子関係検査診断 (以下、TK 式と略す)

「親が日常の家庭生活の中で、子どもに対してどのような態度でどのような扱い方をしているか」を測ることを目的とした検査である。本調査では母親の自己評価の観点から、「拒否 (①不満、②非難)」「支配 (③厳格、④期待)」「保護 (⑤干渉、⑥心配)」「服従 (⑦溺愛、⑧盲従)」「矛盾・不一致 (⑨矛盾、⑩不一致)」の5つの領域 (計10項目) で診断する。対象年齢は幼児から中学生までである。なお、この検査では得点が高いほど傾向が低いことを示す。

#### (3) 感覚特性を取り入れた自己理解・他者理解プログラムについて

サンデプラス、アスコミスリムの活動の中に感覚特性を取り入れたプログラムを行った。介入前に、披受容感・披拒絶感尺度、本人用AQ、自尊感情尺度、ストレス尺度などの質問紙に回答後、「感覚の魔術師」と称し、AASP 青年・成人感覚プロフィールと、感覚特性に関する心理教育を行った。プログラム内容は、被験者に感覚過敏 (視覚過敏や聴覚過敏など) の種類と、それらに絵が付いている、チェックシートを配布し回答してもらった。その後、2人1組になって貰い、各々の類似している感

覚特性について話し合いを行った。

## 6. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、関西福祉科学大学研究倫理委員会において承認を得た。調査対象者には、研究の目的と方法等について、調査への拒否・中止・回答は自由意志によること、これにより不利益は被らないことを口頭で説明し、X年度の総会時に書面による同意書を持って、調査快諾を受け、書面にて同意を得た。なお、データは全てコンピューター処理を行い、個人情報情報を厳重に管理した。

## IV.結果

### 1. 感覚特性と年齢/知的水準との関係について

SPの「低登録」と年齢において有意な負の相関 ( $\rho = -.481, p < .05$ ) が認められた。しかし、その他の象限と年齢/WISC全IQとの相関は見られなかった。(表.2)

表. 2 SPと年齢/知的水準との相関

			SP低登録	SP感覚探求	SP感覚過敏	SP感覚回避
Spearmanの ロー( $\rho$ )	年齢	相関係数	-.481*	-0.412	-0.315	-0.397
		有意確率 (両側)	0.032	0.071	0.176	0.083
		度数	20	20	20	20
	ウェクス ラー全IQ	相関係数	-0.199	-0.177	-0.182	0.037
		有意確率 (両側)	0.460	0.512	0.499	0.892
		度数	16	16	16	16

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

## 2. 感覚特性と発達特性との関係について

### (1) SP と ADHD-RS との相関分析

SP の「低登録」と ADHD-RS の不注意において有意な正の相関 ( $\rho = .463, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と ADHD-RS の不注意において有意な正の相関 ( $\rho = .494, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と ADHD-RS の不注意において有意な正の相関 ( $\rho = .468, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と ADHD-RS の合計において有意な正の相関 ( $\rho = .496, p < .05$ ) が認められた。(表.3)

表.3 SPとADHD-RSとの相関						
Spearmanの ロー ( $\rho$ )	ADHD-RS不注意	相関係数	SP低登録	SP感覚探求	SP感覚過敏	SP感覚回避
			.463*	0.347	.494*	.468*
		有意確率 (両側)	0.040	0.134	0.027	0.038
	ADHD-RS多 動・衝動	度数	20	20	20	20
		相関係数	0.186	0.299	0.354	0.367
		有意確率 (両側)	0.432	0.200	0.125	0.112
		度数	20	20	20	20
	ADHD-RS (合 計)	相関係数	0.369	0.343	.496*	0.439
		有意確率 (両側)	0.109	0.138	0.026	0.053
		度数	20	20	20	20

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

### (2) SP と CDC との相関分析

SP の「低登録」と CDC において有意な正の相関 ( $\rho = .690, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚探求」と CDC において有意な正の相関 ( $\rho = .451, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と CDC において有意な正の相関 ( $\rho = .597, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と CDC において有意な正の相関 ( $\rho = .652, p < .01$ ) が認められた。(表.4)

表.4 SPとCDCとの相関						
Spearmanの ロー ( $\rho$ )	CDC (合計)	相関係数	SP低登録	SP感覚探求	SP感覚過敏	SP感覚回避
			.690**	.451*	.597**	.652**
		有意確率 (両側)	0.001	0.046	0.005	0.002
		度数	20	20	20	20

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

### (3) SP と AQ との相関分析

SP の「感覚探求」と AQ 注意の切り替えにおいて有意な正の相関 ( $\rho = .601, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚探求」と AQ 細部への注意において有意な正の相関 ( $\rho = .541, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚探求」と AQ コミュニケーションにおいて有意な正の相関 ( $\rho = .484, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と AQ 細部への注意において有意な正の相関 ( $\rho = .710, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と AQ 細部への注意において有意な正の相関 ( $\rho = .583, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と AQ コミュニケーションにおいて有意な正の相関 ( $\rho = .492, p < .05$ ) が認められた。(表.5)

表. 5 SPとAQとの相関						
Spearmanのロー( $\rho$ )	A Q 社会的スキル	相関係数	SP低登録	SP感覚探求	SP感覚過敏	SP感覚回避
		有意確率(両側)				
		度数	20	20	20	20
	A Q 注意の切り替え	相関係数	0.116	.601**	0.143	0.272
		有意確率(両側)	0.626	0.005	0.548	0.247
		度数	20	20	20	20
	A Q 細部への注意	相関係数	0.131	.541*	.710**	.583**
		有意確率(両側)	0.581	0.014	0.000	0.007
		度数	20	20	20	20
	A Q コミュニケーション	相関係数	0.329	.484*	0.380	.492*
		有意確率(両側)	0.157	0.031	0.098	0.028
		度数	20	20	20	20
	A Q 想像力	相関係数	0.225	0.175	0.083	0.045
		有意確率(両側)	0.340	0.461	0.728	0.850
		度数	20	20	20	20
	A Q 全体	相関係数	0.184	0.407	0.311	0.353
		有意確率(両側)	0.437	0.075	0.182	0.127
		度数	20	20	20	20
	成人 A Q 社会的スキル	相関係数	-0.347	-0.377	-0.234	-0.109
		有意確率(両側)	0.187	0.149	0.382	0.688
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q 注意の切り替え	相関係数	-0.327	0.001	-0.457	-0.341
		有意確率(両側)	0.216	0.998	0.075	0.196
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q 細部への注意	相関係数	-0.385	-0.192	-0.027	-0.204
		有意確率(両側)	0.140	0.475	0.922	0.448
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q コミュニケーション	相関係数	0.069	0.082	-0.036	0.009
		有意確率(両側)	0.798	0.764	0.895	0.974
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q 想像力	相関係数	-0.180	-0.014	-0.379	-0.174
		有意確率(両側)	0.506	0.958	0.147	0.519
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q 全体	相関係数	-0.452	-0.265	-0.411	-0.369
		有意確率(両側)	0.079	0.321	0.114	0.159
		度数	16	16	16	16

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

### 3. 感覚特性と養育態度との関係について

#### (1) SP と TK 式診断的新親子関係検査診断との相関分析

SP の「低登録」と TK 式の溺愛において有意な負の相関 ( $\rho = -.477, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚探求」と TK 式の非難において有意な負の相関 ( $\rho = -.536, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚探求」と TK 式の厳格において有意な負の相関 ( $\rho = -.626, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚探求」と TK 式の期待において有意な負の相関 ( $\rho = -.464, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚探求」と TK 式の盲従において有意な負の相関 ( $\rho = -.474, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚探求」と TK 式の矛盾において有意な負の相関 ( $\rho = -.544, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と TK 式の溺愛において有意な負の相関 ( $\rho = -.581, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と TK 式の干渉において有意な負の相関 ( $\rho = -.476, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と TK 式の溺愛において有意な負の相関 ( $\rho = -.462, p < .05$ ) が認められた。(表.6)

表. 6 SPとTK式との相関						
Spearmanの $\rho$ (p)	TK式 (1) 不安	相関係数	SP低登録	SP感覚探求	SP感覚過敏	SP感覚回避
		有意確率 (両側)				
		度数	19	19	19	19
	TK式 (2) 非難	相関係数	0.080	-.536*	-0.081	-0.027
		有意確率 (両側)	0.746	0.018	0.743	0.914
		度数	19	19	19	19
	TK式 (3) 厳格	相関係数	-0.034	-.626**	-0.158	-0.074
		有意確率 (両側)	0.891	0.004	0.519	0.763
		度数	19	19	19	19
	TK式 (4) 期待	相関係数	-0.031	-.464*	-0.030	0.010
		有意確率 (両側)	0.900	0.046	0.904	0.968
		度数	19	19	19	19
	TK式 (5) 干渉	相関係数	-0.405	-0.423	-0.391	-.476*
		有意確率 (両側)	0.085	0.071	0.098	0.039
		度数	19	19	19	19
	TK式 (6) 心配	相関係数	-0.250	-0.381	-0.264	-0.142
		有意確率 (両側)	0.302	0.108	0.274	0.561
		度数	19	19	19	19
	TK式 (7) 溺愛	相関係数	-.477*	-.531*	-.581**	-.462*
		有意確率 (両側)	0.039	0.019	0.009	0.046
		度数	19	19	19	19
	TK式 (8) 盲従	相関係数	-0.190	-.474*	-0.294	-0.244
		有意確率 (両側)	0.436	0.040	0.221	0.314
		度数	19	19	19	19
	TK式 (9) 矛盾	相関係数	-0.204	-.544*	-0.347	-0.062
		有意確率 (両側)	0.401	0.016	0.146	0.800
		度数	19	19	19	19
	TK式 (10) 不一致	相関係数	-0.035	-0.346	-0.199	-0.104
		有意確率 (両側)	0.886	0.147	0.415	0.672
		度数	19	19	19	19

\*, 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*, 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

#### 4. 感覚特性と二次障害との関係について

##### (1) SP と CBCL との相関分析

SP の「低登録」と CBCL の不安抑うつにおいて有意な正の相関 ( $\rho = .585, p < .01$ ) が認められた。SP の「低登録」と CBCL の身体愁訴において有意な正の相関 ( $\rho = .503, p < .05$ ) が認められた。SP の「低登録」と CBCL の内向尺度において有意な正の相関 ( $\rho = .659, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と CBCL の不安抑うつにおいて有意な正の相関 ( $\rho = .746, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と CBCL の身体愁訴において有意な正の相関 ( $\rho = .644, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と CBCL の攻撃的行動において有意な正の相関 ( $\rho = .573, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と CBCL の内向尺度において有意な正の相関 ( $\rho = .712, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と CBCL の外向尺度において有意な正の相関 ( $\rho = .475, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と CBCL の全問題尺度において有意な正の相関 ( $\rho = .529, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と CBCL の不安抑うつにおいて有意な正の相関 ( $\rho = .799, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と CBCL の身体愁訴において有意な正の相関 ( $\rho = .658, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と CBCL の社会性の問題について有意な正の相関 ( $\rho = .553, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と CBCL の攻撃的行動において有意な正の相関 ( $\rho = .473, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と CBCL の内向尺度において有意な正の相関 ( $\rho = .786, p < .01$ ) が認められた。「感覚回避」と CBCL の全問題尺度において有意な正の相関 ( $\rho = .643, p < .01$ ) が認められた。(表.7)

表. 7 SPとCBCLとの相関

			SP低登録	SP感覚探求	SP感覚過敏	SP感覚回避
Spearmanの ロー(ρ)	CBCL不安/抑 うつ	相関係数	.585**	0.385	.746**	.799**
		有意確率 (両側)	0.007	0.094	0.000	0.000
		度数	20	20	20	20
	CBCL引きこ もり/抑うつ	相関係数	0.103	-0.083	-0.016	0.114
		有意確率 (両側)	0.666	0.728	0.948	0.631
		度数	20	20	20	20
	CBCL身体愁 訴	相関係数	.503*	0.059	.644**	.658**
		有意確率 (両側)	0.024	0.803	0.002	0.002
		度数	20	20	20	20
	CBCL社会性 の問題	相関係数	0.393	0.277	0.432	.553*
		有意確率 (両側)	0.087	0.237	0.057	0.011
		度数	20	20	20	20
	CBCL思考の 問題	相関係数	-0.030	0.396	0.127	0.074
		有意確率 (両側)	0.902	0.084	0.595	0.757
		度数	20	20	20	20
	CBCL注意の 問題	相関係数	0.211	0.312	0.265	0.391
		有意確率 (両側)	0.372	0.180	0.258	0.088
		度数	20	20	20	20
	CBCL規則違 反的行動	相関係数	-0.031	0.189	0.188	0.147
		有意確率 (両側)	0.896	0.425	0.426	0.535
		度数	20	20	20	20
	CBCL攻撃的 行動	相関係数	0.239	0.144	.573**	.473*
		有意確率 (両側)	0.310	0.545	0.008	0.035
		度数	20	20	20	20
	CBCLその他 の問題	相関係数	-0.141	-0.020	0.056	0.064
		有意確率 (両側)	0.554	0.933	0.814	0.789
		度数	20	20	20	20
	CBCL内向尺 度(合計)	相関係数	.659**	0.244	.712**	.786**
		有意確率 (両側)	0.002	0.300	0.000	0.000
		度数	20	20	20	20
	CBCL外向尺 度(合計)	相関係数	0.202	0.151	.475*	0.372
		有意確率 (両側)	0.393	0.526	0.034	0.106
		度数	20	20	20	20
	CBCL全問題 尺度(合 計)	相関係数	0.416	0.250	.529*	.643**
		有意確率 (両側)	0.068	0.288	0.016	0.002
		度数	20	20	20	20

\*. 相関係数は 5% 水準で有意(両側)です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意(両側)です。

## (2) SP と本人のストレスとの相関分析

SP の「低登録」「感覚探求」「感覚過敏」「感覚回避」と本人のストレスに関して有意な相関は認められなかった。(表.8)

			SP低登録	SP感覚探求	SP感覚過敏	SP感覚回避
Spearmanの ロー( $\rho$ )	ストレス尺 度合計	相関係数	-0.327	-0.102	-0.300	-0.209
		有意確率 (両側)	0.217	0.708	0.259	0.436
		度数	16	16	16	16

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

## (3) AASP と本人のストレスとの相関分析

AASP の「低登録」と本人のストレスにおいて有意な正の相関 ( $\rho = .488, p < .05$ ) が認められた。(表.9)

表.9 AASPとストレスとの相関						
			AASP低登録7月	AASP感覚探求7月	AASP感覚過敏7月	AASP感覚回避7月
Spearmanのロー( $\rho$ )	ストレス尺度合計	相関係数	.488*	-0.055	0.267	0.208
		有意確率(両側)	0.047	0.835	0.300	0.424
		度数	17	17	17	17

\*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。



## 5. 養育者が捉える感覚特性と本人が捉える感覚特性との関係について

### (1) SP と AASP との相関分析

AASP の「感覚過敏」と、AASP の「低登録」において有意な正の相関 ( $\rho = .588, p < .05$ ) が認められた。AASP の「感覚回避」と、AASP の「低登録」に有意な正の相関 ( $\rho = .651, p < .01$ ) が認められた。AASP の「感覚回避」と、AASP の「感覚過敏」において有意な正の相関 ( $\rho = .783, p < .01$ ) が認められた。

SP の「感覚探求」と、SP の「低登録」において有意な正の相関 ( $\rho = .447, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と、SP の「低登録」において有意な正の相関 ( $\rho = .679, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と、SP の「低登録」において有意な正の相関 ( $\rho = .703, p < .01$ ) が認められた。SP の「感覚過敏」と、SP の「感覚探求」において有意な正の相関 ( $\rho = .519, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚回避」と、SP の「感覚探求」において有意な正の相関 ( $\rho = .458, p < .05$ ) が認められた。SP の「感覚回避」SP の「感覚過敏」において有意な正の相関 ( $\rho = .780, p < .01$ ) が認められた。しかし、AASP と SP においては有意な相関は認められなかった。(表.10)

表. 10 AASPとSPとの相関										
Spearmanの ロー( $\rho$ )	SP低登録	相関係数	SP低登録	SP感覚探求	SP感覚過敏	SP感覚回避	AASP低登録7 月	AASP感覚探 求7月	AASP感覚過 敏7月	AASP感覚回 避7月
			有意確率 (両側)	有意確率 (両側)	有意確率 (両側)	有意確率 (両側)	有意確率 (両側)	有意確率 (両側)	有意確率 (両側)	有意確率 (両側)
		度数	20	20	20	20	16	16	16	16
	SP感覚探求	相関係数	.447*	1.000	.519*	.458*	0.179	0.078	0.291	0.183
		有意確率 (両側)	0.048		0.019	0.042	0.507	0.774	0.275	0.498
		度数	20	20	20	20	16	16	16	16
	SP感覚過敏	相関係数	.679**	.519*	1.000	.780**	0.205	0.322	0.266	0.313
		有意確率 (両側)	0.001	0.019		0.000	0.445	0.224	0.319	0.237
		度数	20	20	20	20	16	16	16	16
	SP感覚回避	相関係数	.703**	.458*	.780**	1.000	0.161	0.072	0.335	0.311
		有意確率 (両側)	0.001	0.042	0.000		0.550	0.792	0.205	0.242
		度数	20	20	20	20	16	16	16	16
	AASP低登録7 月	相関係数	0.087	0.179	0.205	0.161	1.000	0.416	.588*	.651**
		有意確率 (両側)	0.749	0.507	0.445	0.550		0.097	0.013	0.005
		度数	16	16	16	16	17	17	17	17
	AASP感覚探 求7月	相関係数	0.037	0.078	0.322	0.072	0.416	1.000	0.065	0.241
		有意確率 (両側)	0.892	0.774	0.224	0.792	0.097		0.805	0.351
		度数	16	16	16	16	17	17	17	17
	AASP感覚過 敏7月	相関係数	0.118	0.291	0.266	0.335	.588*	0.065	1.000	.783**
		有意確率 (両側)	0.662	0.275	0.319	0.205	0.013	0.805		0.000
		度数	16	16	16	16	17	17	17	17
	AASP感覚回 避7月	相関係数	0.164	0.183	0.313	0.311	.651**	0.241	.783**	1.000
		有意確率 (両側)	0.543	0.498	0.237	0.242	0.005	0.351	0.000	
		度数	16	16	16	16	17	17	17	17

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

6. 養育者が捉える感覚特性と本人が捉える感覚特性とのギャップとそのストレスおよび発達特性、自尊感情との関係について

(1) SP/AASP のギャップとの関係

① SP/AASP のギャップとストレスとの相関分析

AASP と SP の「低登録」のギャップとストレスにおいて有意な負の相関 ( $\rho = -.564, p < .05$ ) が認められた。(表.11-1)

表. 11-1 SP/AASPのギャップとストレスとの相関						
			SPギャップ AASP (7月) 低 登録	SPギャップ AASP (7月) 感 覚探求	SPギャップ AASP (7月) 感 覚過敏	SPギャップ AASP (7月) 感 覚回避
Spearmanの ロー( $\rho$ )	ストレス尺 度合計	相関係数	-. 564*	0. 026	-0. 401	-0. 300
		有意確率 (両側)	0. 023	0. 924	0. 123	0. 259
		度数	16	16	16	16

\*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

②SP/AASP のギャップとストレスとの相関分析によるストレス尺度の平均の分散分析

感覚異常の周囲の理解と、ASD 本人の自己理解に相関が認められないため、両者のギャップに着目し、そのギャップがストレスに影響を与えているのかを明らかにするため、SP と AASP (7 月) との差を、各 4 象限ごとに下記の通りコード化し、各 4 象限におけるこれら 3 群間でのストレス尺度に差が見られるかを検証した。

- 1) コード 1 : SP > AASP (感覚異常に関して周囲の理解に比して ASD 本人の自己理解が乏しい群)
- 2) コード 2 : SP = AASP (感覚異常に関して周囲の理解と ASD 本人の自己理解が等しい群)
- 3) コード 3 : SP < AASP (感覚異常に関して ASD 本人の自己理解に比して周囲の理解が乏しい群)

「低登録」におけるズレ（ギャップ）3群間のストレス尺度平均点の比較（3群間の分散分析）（表.11-2）と等分散性の検定（表.11-3）

表. 11-2 分散分析

ストレス尺度合計

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	701. 959	2	350. 979	3. 413	. 064
グループ内	1336. 979	13	102. 845		
合計	2038. 938	15			

表. 11-3 等分散性の検定

ストレス尺度合計

Levene 統計量	自由度 1	自由度 2	有意確率
. 184	2	13	. 834

感覚特性に対する養育者の気づきが大きいのか、本人の気づきが大きいのかを調べるために多重比較を行った。（表.11-4）

表. 11-4 「低登録」におけるSP/AASPのギャップとストレスの多重比較

従属変数: ストレス尺度合計							
	(I) SP ギャップ AASP (7月) 低 登録コード	(J) SP ギャップ AASP (7月) 低 登録コード	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
						下限	上限
Tukey HSD	SP>AASP	SP=AASP	-9. 95	6. 803	0. 34	-27. 91	8. 01
		SP<AASP	-15. 486	5. 938	0. 053	-31. 16	0. 19
	SP=AASP	SP>AASP	9. 95	6. 803	0. 34	-8. 01	27. 91
		SP<AASP	-5. 536	6. 356	0. 667	-22. 32	11. 25
	SP<AASP	SP>AASP	15. 486	5. 938	0. 053	-0. 19	31. 16
		SP=AASP	5. 536	6. 356	0. 667	-11. 25	22. 32
Bonferroni	SP>AASP	SP=AASP	-9. 95	6. 803	0. 502	-28. 63	8. 73
		SP<AASP	-15. 486	5. 938	0. 065	-31. 79	0. 82
	SP=AASP	SP>AASP	9. 95	6. 803	0. 502	-8. 73	28. 63
		SP<AASP	-5. 536	6. 356	1	-22. 99	11. 92
	SP<AASP	SP>AASP	15. 486	5. 938	0. 065	-0. 82	31. 79
		SP=AASP	5. 536	6. 356	1	-11. 92	22. 99

以上により、「低登録」にのみ、ズレ（ギャップ）における3群間のストレス尺度合計平均点に差（有意傾向）が認められ、「第③群（コード3：SP<AASP）」>「第②群（コード2：SP=AASP）」>「第①群（コード1：SP>AASP）」の順で、ストレス尺度合計点が高かった。なお、Kruskal Wallis 検定を行ったところ（表.11-5）、カイ2乗検定値 5.474、漸近有意確率.065 と有意水準を満たさなかったものの（表.11-6）、同様の傾向が窺えた。

#### Kruskal Wallis 検定

**表. 11-5 順位**

	SPギャップAASP(7月)低登録コード	度数	平均ランク
ストレス尺度合計	SP>AASP	5	4.50
	SP=AASP	4	9.25
	SP<AASP	7	10.93
	合計	16	

**表. 11-6 検定統計量<sup>a, b</sup>**

ストレス尺度合計	
カイ 2 乗	5.474
自由度	2
漸近有意確率	.065

a. Kruskal Wallis 検定

b. グループ化変数：SPギャップAASP(7月)低登録コード

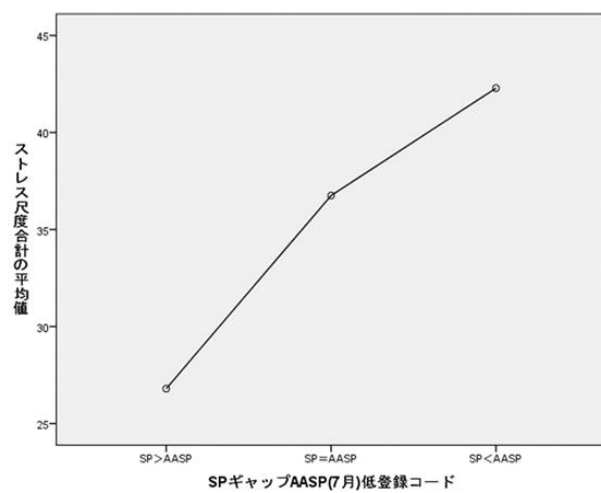


図.2 SP/AASP のギャップとストレス尺度合計の平均値

(2) SP/AASP のギャップと発達特性との関係について

① SP/AASP のギャップと成人用 AQ との相関分析

AASP と SP の「低登録」のギャップと成人用 AQ 社会的スキルにおいて有意な負の相関 ( $\rho = -.639, p < .01$ ) が認められた。AASP と SP の「感覚過敏」のギャップと成人用 AQ 社会的スキルにおいて有意な負の相関 ( $\rho = -.569, p < .05$ ) が認められた。AASP と SP の「感覚過敏」のギャップと成人用 AQ 注意の切り替えにおいて有意な負の相関 ( $\rho = -.655, p < .01$ ) が認められた。AASP と SP の「感覚回避」のギャップと成人用 AQ 注意の切り替えにおいて有意な負の相関 ( $\rho = -.541, p < .05$ ) が認められた。(表.12-1)

表. 12-1 SP/AASPのギャップと成人用AQとの相関						
Spearmanの ロー( $\rho$ )	A Q 社会的 スキル	相関係数	SPギャップ AASP (7月) 低 登録	SPギャップ AASP (7月) 感 覚探求	SPギャップ AASP (7月) 感 覚過敏	SPギャップ AASP (7月) 感 覚回避
			有意確率 (両側)	有意確率 (両側)	有意確率 (両側)	有意確率 (両側)
	A Q 社会的 スキル	相関係数	-0.160	-0.067	-0.152	-0.215
		有意確率 (両側)	0.555	0.804	0.573	0.424
		度数	16	16	16	16
	A Q 注意の 切り替え	相関係数	0.106	0.182	0.057	0.124
		有意確率 (両側)	0.697	0.500	0.833	0.649
		度数	16	16	16	16
	A Q 細部へ の注意	相関係数	0.046	0.232	0.349	0.331
		有意確率 (両側)	0.867	0.388	0.186	0.210
		度数	16	16	16	16
	A Q コミュ ニケーショ ン	相関係数	0.021	0.276	-0.197	0.097
		有意確率 (両側)	0.938	0.301	0.466	0.720
		度数	16	16	16	16
	A Q 想像力	相関係数	0.206	0.369	-0.145	-0.070
		有意確率 (両側)	0.443	0.160	0.593	0.796
		度数	16	16	16	16
	A Q 全体	相関係数	0.012	0.290	-0.046	0.059
		有意確率 (両側)	0.966	0.276	0.864	0.827
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q 社 会的スキル	相関係数	-.639**	-0.331	-.569*	-0.269
		有意確率 (両側)	0.008	0.210	0.021	0.314
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q 注 意の切り替 え	相関係数	-0.469	0.241	-.655**	-.541*
		有意確率 (両側)	0.067	0.368	0.006	0.030
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q 細 部への注意	相関係数	-0.030	0.041	0.461	0.232
		有意確率 (両側)	0.911	0.879	0.072	0.386
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q コ ミュニケー ション	相関係数	-0.471	0.240	-0.441	-0.453
		有意確率 (両側)	0.066	0.371	0.087	0.078
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q 想 像力	相関係数	-0.025	0.256	-0.174	-0.097
		有意確率 (両側)	0.926	0.339	0.519	0.722
		度数	16	16	16	16
	成人 A Q 全 体	相関係数	-0.466	0.145	-0.474	-0.417
		有意確率 (両側)	0.069	0.591	0.064	0.108
		度数	16	16	16	16

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

②SP/AASP のギャップによる成人用 AQ の各下位尺度の平均の分散分析

感覚異常の周囲の理解（気づき）と ASD 本人の自己理解（気づき）のギャップと発達特性との関係を明らかにするため、SP と AASP（7 月）の各 4 象限ごとのギャップ下記 3 群間での発達特性各下位得点等の平均に差が見られるかを検討した。

- 1) コード 1 :  $SP > AASP$ （感覚異常に関して周囲の理解に比して ASD 本人の自己理解が乏しい群）
- 2) コード 2 :  $SP = AASP$ （感覚異常に関して周囲の理解と ASD 本人の自己理解が等しい群）
- 3) コード 3 :  $SP < AASP$ （感覚異常に関して ASD 本人の自己理解に比して周囲の理解が乏しい群）

感覚特性に対する養育者の気づきが大きいのか、本人の気づきが大きいのかを調べるために多重比較を行った。

(a) 「低登録」における SP/AASP のギャップと成人用 AQ の多重比較 (表.12-2)

表. 12-2 「低登録」におけるSP/AASPのギャップと成人用AQの多重比較								
従属変数		(I) SP ギャップ AASP (7月) 低 登録コード	(J) SP ギャップ AASP (7月) 低 登録コード	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
							下限	上限
成人AQ社会的スキル	Tukey HSD	SP>AASP	SP=AASP	-2	1.334	0.323	-5.52	1.52
			SP<AASP	-3.714*	1.165	0.018	-6.79	-0.64
		SP=AASP	SP>AASP	2	1.334	0.323	-1.52	5.52
			SP<AASP	-1.714	1.247	0.382	-5.01	1.58
		SP<AASP	SP>AASP	3.714*	1.165	0.018	0.64	6.79
			SP=AASP	1.714	1.247	0.382	-1.58	5.01
	Scheffe	SP>AASP	SP=AASP	-2	1.334	0.355	-5.68	1.68
			SP<AASP	-3.714*	1.165	0.023	-6.93	-0.5
		SP=AASP	SP>AASP	2	1.334	0.355	-1.68	5.68
			SP<AASP	-1.714	1.247	0.414	-5.15	1.73
		SP<AASP	SP>AASP	3.714*	1.165	0.023	0.5	6.93
			SP=AASP	1.714	1.247	0.414	-1.73	5.15
	Bonferroni	SP>AASP	SP=AASP	-2	1.334	0.473	-5.66	1.66
			SP<AASP	-3.714*	1.165	0.021	-6.91	-0.52
		SP=AASP	SP>AASP	2	1.334	0.473	-1.66	5.66
			SP<AASP	-1.714	1.247	0.577	-5.14	1.71
		SP<AASP	SP>AASP	3.714*	1.165	0.021	0.52	6.91
			SP=AASP	1.714	1.247	0.577	-1.71	5.14
成人AQ注意の切り替え	Tukey HSD	SP>AASP	SP=AASP	-1.35	1.225	0.53	-4.59	1.89
			SP<AASP	-1.886	1.07	0.22	-4.71	0.94
		SP=AASP	SP>AASP	1.35	1.225	0.53	-1.89	4.59
			SP<AASP	-0.536	1.145	0.887	-3.56	2.49
		SP<AASP	SP>AASP	1.886	1.07	0.22	-0.94	4.71
			SP=AASP	0.536	1.145	0.887	-2.49	3.56
	Scheffe	SP>AASP	SP=AASP	-1.35	1.225	0.56	-4.73	2.03
			SP<AASP	-1.886	1.07	0.248	-4.84	1.07
		SP=AASP	SP>AASP	1.35	1.225	0.56	-2.03	4.73
			SP<AASP	-0.536	1.145	0.897	-3.69	2.62
		SP<AASP	SP>AASP	1.886	1.07	0.248	-1.07	4.84
			SP=AASP	0.536	1.145	0.897	-2.62	3.69
	Bonferroni	SP>AASP	SP=AASP	-1.35	1.225	0.872	-4.71	2.01
			SP<AASP	-1.886	1.07	0.304	-4.82	1.05
		SP=AASP	SP>AASP	1.35	1.225	0.872	-2.01	4.71
			SP<AASP	-0.536	1.145	1	-3.68	2.61
		SP<AASP	SP>AASP	1.886	1.07	0.304	-1.05	4.82
			SP=AASP	0.536	1.145	1	-2.61	3.68



成人 A Q 細部への注意	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	0.2	1.437	0.989	-3.59	3.99
			SP < AASP	0.343	1.254	0.96	-2.97	3.65
		SP = AASP	SP > AASP	-0.2	1.437	0.989	-3.99	3.59
			SP < AASP	0.143	1.343	0.994	-3.4	3.69
		SP < AASP	SP > AASP	-0.343	1.254	0.96	-3.65	2.97
			SP = AASP	-0.143	1.343	0.994	-3.69	3.4
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	0.2	1.437	0.99	-3.76	4.16
			SP < AASP	0.343	1.254	0.963	-3.12	3.8
		SP = AASP	SP > AASP	-0.2	1.437	0.99	-4.16	3.76
			SP < AASP	0.143	1.343	0.994	-3.56	3.85
		SP < AASP	SP > AASP	-0.343	1.254	0.963	-3.8	3.12
			SP = AASP	-0.143	1.343	0.994	-3.85	3.56
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	0.2	1.437	1	-3.75	4.15
			SP < AASP	0.343	1.254	1	-3.1	3.79
		SP = AASP	SP > AASP	-0.2	1.437	1	-4.15	3.75
			SP < AASP	0.143	1.343	1	-3.54	3.83
		SP < AASP	SP > AASP	-0.343	1.254	1	-3.79	3.1
			SP = AASP	-0.143	1.343	1	-3.83	3.54
成人 A Q コミュニケーション	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	-0.8	1.652	0.88	-5.16	3.56
			SP < AASP	-2.8	1.442	0.166	-6.61	1.01
		SP = AASP	SP > AASP	0.8	1.652	0.88	-3.56	5.16
			SP < AASP	-2	1.543	0.422	-6.07	2.07
		SP < AASP	SP > AASP	2.8	1.442	0.166	-1.01	6.61
			SP = AASP	2	1.543	0.422	-2.07	6.07
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	-0.8	1.652	0.89	-5.36	3.76
			SP < AASP	-2.8	1.442	0.191	-6.78	1.18
		SP = AASP	SP > AASP	0.8	1.652	0.89	-3.76	5.36
			SP < AASP	-2	1.543	0.454	-6.26	2.26
		SP < AASP	SP > AASP	2.8	1.442	0.191	-1.18	6.78
			SP = AASP	2	1.543	0.454	-2.26	6.26
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	-0.8	1.652	1	-5.34	3.74
			SP < AASP	-2.8	1.442	0.222	-6.76	1.16
		SP = AASP	SP > AASP	0.8	1.652	1	-3.74	5.34
			SP < AASP	-2	1.543	0.652	-6.24	2.24
		SP < AASP	SP > AASP	2.8	1.442	0.222	-1.16	6.76
			SP = AASP	2	1.543	0.652	-2.24	6.24

成人 A Q 想像力	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	-0.55	1.567	0.935	-4.69	3.59
			SP < AASP	-0.086	1.368	0.998	-3.7	3.53
		SP = AASP	SP > AASP	0.55	1.567	0.935	-3.59	4.69
			SP < AASP	0.464	1.465	0.946	-3.4	4.33
		SP < AASP	SP > AASP	0.086	1.368	0.998	-3.53	3.7
			SP = AASP	-0.464	1.465	0.946	-4.33	3.4
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	-0.55	1.567	0.941	-4.87	3.77
			SP < AASP	-0.086	1.368	0.998	-3.86	3.69
		SP = AASP	SP > AASP	0.55	1.567	0.941	-3.77	4.87
			SP < AASP	0.464	1.465	0.951	-3.58	4.5
		SP < AASP	SP > AASP	0.086	1.368	0.998	-3.69	3.86
			SP = AASP	-0.464	1.465	0.951	-4.5	3.58
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	-0.55	1.567	1	-4.85	3.75
			SP < AASP	-0.086	1.368	1	-3.84	3.67
		SP = AASP	SP > AASP	0.55	1.567	1	-3.75	4.85
			SP < AASP	0.464	1.465	1	-3.56	4.49
		SP < AASP	SP > AASP	0.086	1.368	1	-3.67	3.84
			SP = AASP	-0.464	1.465	1	-4.49	3.56

成人 A Q 全体	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	-4.5	4.076	0.528	-15.26	6.26
			SP < AASP	-8.143	3.557	0.093	-17.54	1.25
		SP = AASP	SP > AASP	4.5	4.076	0.528	-6.26	15.26
			SP < AASP	-3.643	3.808	0.616	-13.7	6.41
		SP < AASP	SP > AASP	8.143	3.557	0.093	-1.25	17.54
			SP = AASP	3.643	3.808	0.616	-6.41	13.7
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	-4.5	4.076	0.558	-15.74	6.74
			SP < AASP	-8.143	3.557	0.111	-17.96	1.67
		SP = AASP	SP > AASP	4.5	4.076	0.558	-6.74	15.74
			SP < AASP	-3.643	3.808	0.643	-14.15	6.86
		SP < AASP	SP > AASP	8.143	3.557	0.111	-1.67	17.96
			SP = AASP	3.643	3.808	0.643	-6.86	14.15
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	-4.5	4.076	0.869	-15.69	6.69
			SP < AASP	-8.143	3.557	0.118	-17.91	1.63
		SP = AASP	SP > AASP	4.5	4.076	0.869	-6.69	15.69
			SP < AASP	-3.643	3.808	1	-14.1	6.81
		SP < AASP	SP > AASP	8.143	3.557	0.118	-1.63	17.91
			SP = AASP	3.643	3.808	1	-6.81	14.1

\*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。

(b)「感覚過敏」における SP/AASP のギャップと成人用 AQ の多重比較 (表.12-3)

表. 12-3 「感覚過敏」におけるSP/AASPのギャップと成人用AQの多重比較								
従属変数		(I) SP ギャップ AASP (7月) 感 覚過敏コー ド	(J) SP ギャップ AASP (7月) 感 覚過敏コー ド	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
							下限	上限
成人AQ社 会的スキル	Tukey HSD	SP>AASP	SP=AASP	-1.75	1.405	0.449	-5.46	1.96
			SP<AASP	-3.167	1.257	0.062	-6.48	0.15
		SP=AASP	SP>AASP	1.75	1.405	0.449	-1.96	5.46
			SP<AASP	-1.417	1.405	0.585	-5.13	2.29
		SP<AASP	SP>AASP	3.167	1.257	0.062	-0.15	6.48
			SP=AASP	1.417	1.405	0.585	-2.29	5.13
	Scheffe	SP>AASP	SP=AASP	-1.75	1.405	0.481	-5.63	2.13
			SP<AASP	-3.167	1.257	0.075	-6.63	0.3
		SP=AASP	SP>AASP	1.75	1.405	0.481	-2.13	5.63
			SP<AASP	-1.417	1.405	0.613	-5.29	2.46
		SP<AASP	SP>AASP	3.167	1.257	0.075	-0.3	6.63
			SP=AASP	1.417	1.405	0.613	-2.46	5.29
	Bonferroni	SP>AASP	SP=AASP	-1.75	1.405	0.705	-5.61	2.11
			SP<AASP	-3.167	1.257	0.077	-6.62	0.28
		SP=AASP	SP>AASP	1.75	1.405	0.705	-2.11	5.61
			SP<AASP	-1.417	1.405	0.995	-5.27	2.44
		SP<AASP	SP>AASP	3.167	1.257	0.077	-0.28	6.62
			SP=AASP	1.417	1.405	0.995	-2.44	5.27
成人AQ注 意の切り替 え	Tukey HSD	SP>AASP	SP=AASP	-2	0.961	0.133	-4.54	0.54
			SP<AASP	-2.833*	0.86	0.015	-5.1	-0.56
		SP=AASP	SP>AASP	2	0.961	0.133	-0.54	4.54
			SP<AASP	-0.833	0.961	0.67	-3.37	1.7
		SP<AASP	SP>AASP	2.833*	0.86	0.015	0.56	5.1
			SP=AASP	0.833	0.961	0.67	-1.7	3.37
	Scheffe	SP>AASP	SP=AASP	-2	0.961	0.154	-4.65	0.65
			SP<AASP	-2.833*	0.86	0.019	-5.21	-0.46
		SP=AASP	SP>AASP	2	0.961	0.154	-0.65	4.65
			SP<AASP	-0.833	0.961	0.694	-3.49	1.82
		SP<AASP	SP>AASP	2.833*	0.86	0.019	0.46	5.21
			SP=AASP	0.833	0.961	0.694	-1.82	3.49
	Bonferroni	SP>AASP	SP=AASP	-2	0.961	0.173	-4.64	0.64
			SP<AASP	-2.833*	0.86	0.017	-5.19	-0.47
		SP=AASP	SP>AASP	2	0.961	0.173	-0.64	4.64
			SP<AASP	-0.833	0.961	1	-3.47	1.81
		SP<AASP	SP>AASP	2.833*	0.86	0.017	0.47	5.19
			SP=AASP	0.833	0.961	1	-1.81	3.47

成人 A Q 細 部への注意	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	-0.333	1.169	0.956	-3.42	2.75
			SP < AASP	2	1.046	0.175	-0.76	4.76
		SP = AASP	SP > AASP	0.333	1.169	0.956	-2.75	3.42
			SP < AASP	2.333	1.169	0.153	-0.75	5.42
		SP < AASP	SP > AASP	-2	1.046	0.175	-4.76	0.76
			SP = AASP	-2.333	1.169	0.153	-5.42	0.75
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	-0.333	1.169	0.96	-3.56	2.89
			SP < AASP	2	1.046	0.2	-0.89	4.89
		SP = AASP	SP > AASP	0.333	1.169	0.96	-2.89	3.56
			SP < AASP	2.333	1.169	0.176	-0.89	5.56
		SP < AASP	SP > AASP	-2	1.046	0.2	-4.89	0.89
			SP = AASP	-2.333	1.169	0.176	-5.56	0.89
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	-0.333	1.169	1	-3.54	2.88
			SP < AASP	2	1.046	0.234	-0.87	4.87
		SP = AASP	SP > AASP	0.333	1.169	1	-2.88	3.54
			SP < AASP	2.333	1.169	0.202	-0.88	5.54
		SP < AASP	SP > AASP	-2	1.046	0.234	-4.87	0.87
			SP = AASP	-2.333	1.169	0.202	-5.54	0.88
成人 A Q コ ミュニケー ション	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	-1	1.673	0.824	-5.42	3.42
			SP < AASP	-2.333	1.496	0.297	-6.28	1.62
		SP = AASP	SP > AASP	1	1.673	0.824	-3.42	5.42
			SP < AASP	-1.333	1.673	0.711	-5.75	3.08
		SP < AASP	SP > AASP	2.333	1.496	0.297	-1.62	6.28
			SP = AASP	1.333	1.673	0.711	-3.08	5.75
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	-1	1.673	0.838	-5.62	3.62
			SP < AASP	-2.333	1.496	0.328	-6.46	1.8
		SP = AASP	SP > AASP	1	1.673	0.838	-3.62	5.62
			SP < AASP	-1.333	1.673	0.733	-5.95	3.28
		SP < AASP	SP > AASP	2.333	1.496	0.328	-1.8	6.46
			SP = AASP	1.333	1.673	0.733	-3.28	5.95
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	-1	1.673	1	-5.59	3.59
			SP < AASP	-2.333	1.496	0.429	-6.44	1.78
		SP = AASP	SP > AASP	1	1.673	1	-3.59	5.59
			SP < AASP	-1.333	1.673	1	-5.93	3.26
		SP < AASP	SP > AASP	2.333	1.496	0.429	-1.78	6.44
			SP = AASP	1.333	1.673	1	-3.26	5.93

成人 A Q 想像力	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	-1. 417	1. 465	0. 609	-5. 28	2. 45
			SP < AASP	-0. 5	1. 31	0. 923	-3. 96	2. 96
		SP = AASP	SP > AASP	1. 417	1. 465	0. 609	-2. 45	5. 28
			SP < AASP	0. 917	1. 465	0. 809	-2. 95	4. 78
		SP < AASP	SP > AASP	0. 5	1. 31	0. 923	-2. 96	3. 96
			SP = AASP	-0. 917	1. 465	0. 809	-4. 78	2. 95
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	-1. 417	1. 465	0. 636	-5. 46	2. 62
			SP < AASP	-0. 5	1. 31	0. 93	-4. 11	3. 11
		SP = AASP	SP > AASP	1. 417	1. 465	0. 636	-2. 62	5. 46
			SP < AASP	0. 917	1. 465	0. 824	-3. 12	4. 96
		SP < AASP	SP > AASP	0. 5	1. 31	0. 93	-3. 11	4. 11
			SP = AASP	-0. 917	1. 465	0. 824	-4. 96	3. 12
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	-1. 417	1. 465	1	-5. 44	2. 6
			SP < AASP	-0. 5	1. 31	1	-4. 1	3. 1
		SP = AASP	SP > AASP	1. 417	1. 465	1	-2. 6	5. 44
			SP < AASP	0. 917	1. 465	1	-3. 1	4. 94
		SP < AASP	SP > AASP	0. 5	1. 31	1	-3. 1	4. 1
			SP = AASP	-0. 917	1. 465	1	-4. 94	3. 1
成人 A Q 全体	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	-6. 5	4. 023	0. 274	-17. 12	4. 12
			SP < AASP	-6. 833	3. 598	0. 178	-16. 33	2. 67
		SP = AASP	SP > AASP	6. 5	4. 023	0. 274	-4. 12	17. 12
			SP < AASP	-0. 333	4. 023	0. 996	-10. 95	10. 29
		SP < AASP	SP > AASP	6. 833	3. 598	0. 178	-2. 67	16. 33
			SP = AASP	0. 333	4. 023	0. 996	-10. 29	10. 95
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	-6. 5	4. 023	0. 304	-17. 6	4. 6
			SP < AASP	-6. 833	3. 598	0. 204	-16. 76	3. 09
		SP = AASP	SP > AASP	6. 5	4. 023	0. 304	-4. 6	17. 6
			SP < AASP	-0. 333	4. 023	0. 997	-11. 43	10. 76
		SP < AASP	SP > AASP	6. 833	3. 598	0. 204	-3. 09	16. 76
			SP = AASP	0. 333	4. 023	0. 997	-10. 76	11. 43
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	-6. 5	4. 023	0. 39	-17. 55	4. 55
			SP < AASP	-6. 833	3. 598	0. 24	-16. 71	3. 05
		SP = AASP	SP > AASP	6. 5	4. 023	0. 39	-4. 55	17. 55
			SP < AASP	-0. 333	4. 023	1	-11. 38	10. 71
		SP < AASP	SP > AASP	6. 833	3. 598	0. 24	-3. 05	16. 71
			SP = AASP	0. 333	4. 023	1	-10. 71	11. 38
*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。								

(c)「感覚回避」における SP/AASP のギャップと成人用 AQ の多重比較 (表.12-4)

表. 12-4 「感覚回避」における SP/AASP のギャップと成人用 AQ の多重比較								
従属変数		(I) SP ギャップ AASP (7月) 感 覚回避コード	(J) SP ギャップ AASP (7月) 感 覚回避コード	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
							下限	上限
成人 A Q 社 会的スキル	Tukey HSD	SP>AASP	SP=AASP	-1.571	1.475	0.551	-5.47	2.32
			SP<AASP	-1.75	1.69	0.568	-6.21	2.71
		SP=AASP	SP>AASP	1.571	1.475	0.551	-2.32	5.47
			SP<AASP	-0.179	1.579	0.993	-4.35	3.99
		SP<AASP	SP>AASP	1.75	1.69	0.568	-2.71	6.21
			SP=AASP	0.179	1.579	0.993	-3.99	4.35
	Scheffe	SP>AASP	SP=AASP	-1.571	1.475	0.58	-5.64	2.5
			SP<AASP	-1.75	1.69	0.597	-6.41	2.91
		SP=AASP	SP>AASP	1.571	1.475	0.58	-2.5	5.64
			SP<AASP	-0.179	1.579	0.994	-4.53	4.18
		SP<AASP	SP>AASP	1.75	1.69	0.597	-2.91	6.41
			SP=AASP	0.179	1.579	0.994	-4.18	4.53
	Bonferroni	SP>AASP	SP=AASP	-1.571	1.475	0.918	-5.62	2.48
			SP<AASP	-1.75	1.69	0.958	-6.39	2.89
		SP=AASP	SP>AASP	1.571	1.475	0.918	-2.48	5.62
			SP<AASP	-0.179	1.579	1	-4.51	4.16
		SP<AASP	SP>AASP	1.75	1.69	0.958	-2.89	6.39
			SP=AASP	0.179	1.579	1	-4.16	4.51
成人 A Q 注 意の切り替 え	Tukey HSD	SP>AASP	SP=AASP	-1.171	1.013	0.498	-3.85	1.5
			SP<AASP	-2.6	1.161	0.101	-5.66	0.46
		SP=AASP	SP>AASP	1.171	1.013	0.498	-1.5	3.85
			SP<AASP	-1.429	1.084	0.411	-4.29	1.43
		SP<AASP	SP>AASP	2.6	1.161	0.101	-0.46	5.66
			SP=AASP	1.429	1.084	0.411	-1.43	4.29
	Scheffe	SP>AASP	SP=AASP	-1.171	1.013	0.529	-3.97	1.62
			SP<AASP	-2.6	1.161	0.12	-5.8	0.6
		SP=AASP	SP>AASP	1.171	1.013	0.529	-1.62	3.97
			SP<AASP	-1.429	1.084	0.443	-4.42	1.56
		SP<AASP	SP>AASP	2.6	1.161	0.12	-0.6	5.8
			SP=AASP	1.429	1.084	0.443	-1.56	4.42
	Bonferroni	SP>AASP	SP=AASP	-1.171	1.013	0.805	-3.95	1.61
			SP<AASP	-2.6	1.161	0.13	-5.79	0.59
		SP=AASP	SP>AASP	1.171	1.013	0.805	-1.61	3.95
			SP<AASP	-1.429	1.084	0.631	-4.41	1.55
		SP<AASP	SP>AASP	2.6	1.161	0.13	-0.59	5.79
			SP=AASP	1.429	1.084	0.631	-1.55	4.41

成人 A Q 細部への注意	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	1.429	1.179	0.467	-1.68	4.54
			SP < AASP	1.5	1.351	0.525	-2.07	5.07
		SP = AASP	SP > AASP	-1.429	1.179	0.467	-4.54	1.68
			SP < AASP	0.071	1.262	0.998	-3.26	3.4
		SP < AASP	SP > AASP	-1.5	1.351	0.525	-5.07	2.07
			SP = AASP	-0.071	1.262	0.998	-3.4	3.26
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	1.429	1.179	0.499	-1.82	4.68
			SP < AASP	1.5	1.351	0.555	-2.23	5.23
		SP = AASP	SP > AASP	-1.429	1.179	0.499	-4.68	1.82
			SP < AASP	0.071	1.262	0.998	-3.41	3.55
		SP < AASP	SP > AASP	-1.5	1.351	0.555	-5.23	2.23
			SP = AASP	-0.071	1.262	0.998	-3.55	3.41
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	1.429	1.179	0.742	-1.81	4.67
			SP < AASP	1.5	1.351	0.861	-2.21	5.21
		SP = AASP	SP > AASP	-1.429	1.179	0.742	-4.67	1.81
			SP < AASP	0.071	1.262	1	-3.39	3.54
		SP < AASP	SP > AASP	-1.5	1.351	0.861	-5.21	2.21
			SP = AASP	-0.071	1.262	1	-3.54	3.39
成人 A Q コミュニケーション	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	0.714	1.15	0.811	-2.32	3.75
			SP < AASP	-3.750*	1.318	0.034	-7.23	-0.27
		SP = AASP	SP > AASP	-0.714	1.15	0.811	-3.75	2.32
			SP < AASP	-4.464*	1.231	0.008	-7.72	-1.21
		SP < AASP	SP > AASP	3.750*	1.318	0.034	0.27	7.23
			SP = AASP	4.464*	1.231	0.008	1.21	7.72
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	0.714	1.15	0.827	-2.46	3.89
			SP < AASP	-3.750*	1.318	0.043	-7.39	-0.11
		SP = AASP	SP > AASP	-0.714	1.15	0.827	-3.89	2.46
			SP < AASP	-4.464*	1.231	0.011	-7.86	-1.07
		SP < AASP	SP > AASP	3.750*	1.318	0.043	0.11	7.39
			SP = AASP	4.464*	1.231	0.011	1.07	7.86
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	0.714	1.15	1	-2.44	3.87
			SP < AASP	-3.750*	1.318	0.041	-7.37	-0.13
		SP = AASP	SP > AASP	-0.714	1.15	1	-3.87	2.44
			SP < AASP	-4.464*	1.231	0.009	-7.85	-1.08
		SP < AASP	SP > AASP	3.750*	1.318	0.041	0.13	7.37
			SP = AASP	4.464*	1.231	0.009	1.08	7.85

成人 A Q 想像力	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	-0.914	1.351	0.781	-4.48	2.65
			SP < AASP	-0.7	1.548	0.894	-4.79	3.39
		SP = AASP	SP > AASP	0.914	1.351	0.781	-2.65	4.48
			SP < AASP	0.214	1.446	0.988	-3.6	4.03
		SP < AASP	SP > AASP	0.7	1.548	0.894	-3.39	4.79
			SP = AASP	-0.214	1.446	0.988	-4.03	3.6
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	-0.914	1.351	0.799	-4.64	2.81
			SP < AASP	-0.7	1.548	0.904	-4.97	3.57
		SP = AASP	SP > AASP	0.914	1.351	0.799	-2.81	4.64
			SP < AASP	0.214	1.446	0.989	-3.78	4.2
		SP < AASP	SP > AASP	0.7	1.548	0.904	-3.57	4.97
			SP = AASP	-0.214	1.446	0.989	-4.2	3.78
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	-0.914	1.351	1	-4.62	2.8
			SP < AASP	-0.7	1.548	1	-4.95	3.55
		SP = AASP	SP > AASP	0.914	1.351	1	-2.8	4.62
			SP < AASP	0.214	1.446	1	-3.76	4.19
		SP < AASP	SP > AASP	0.7	1.548	1	-3.55	4.95
			SP = AASP	-0.214	1.446	1	-4.19	3.76

成人 A Q 全体	Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	-1.514	3.785	0.916	-11.51	8.48
			SP < AASP	-7.3	4.336	0.248	-18.75	4.15
		SP = AASP	SP > AASP	1.514	3.785	0.916	-8.48	11.51
			SP < AASP	-5.786	4.052	0.356	-16.48	4.91
		SP < AASP	SP > AASP	7.3	4.336	0.248	-4.15	18.75
			SP = AASP	5.786	4.052	0.356	-4.91	16.48
	Scheffe	SP > AASP	SP = AASP	-1.514	3.785	0.924	-11.96	8.93
			SP < AASP	-7.3	4.336	0.278	-19.26	4.66
		SP = AASP	SP > AASP	1.514	3.785	0.924	-8.93	11.96
			SP < AASP	-5.786	4.052	0.388	-16.96	5.39
		SP < AASP	SP > AASP	7.3	4.336	0.278	-4.66	19.26
			SP = AASP	5.786	4.052	0.388	-5.39	16.96
	Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	-1.514	3.785	1	-11.91	8.88
			SP < AASP	-7.3	4.336	0.348	-19.21	4.61
		SP = AASP	SP > AASP	1.514	3.785	1	-8.88	11.91
			SP < AASP	-5.786	4.052	0.531	-16.91	5.34
		SP < AASP	SP > AASP	7.3	4.336	0.348	-4.61	19.21
			SP = AASP	5.786	4.052	0.531	-5.34	16.91

\*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。



「低登録」の SP/AASP のギャップと、成人用 AQ 社会的スキルにおいて有意に ( $p = .018$ ) 「①<③」の傾向が窺えた。「感覚過敏」の SP/AASP のギャップと、成人用 AQ 注意の切り替えにおいて有意に ( $p = .015$ ) 「①<③」の傾向が窺えた。「感覚回避」と成人用 AQ コミュニケーションにおいて有意に ( $p = .034$ ) 「①<③」の傾向が窺えた。

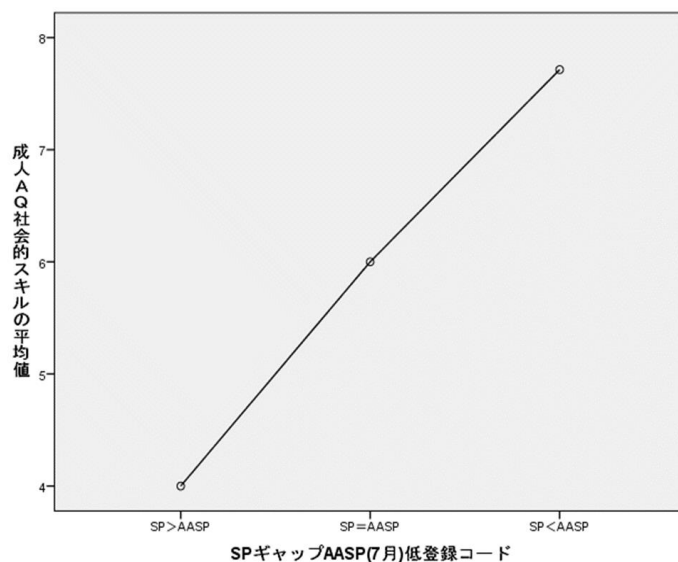


図.3 「低登録」における SP/AASP のギャップと成人用 AQ 社会的スキルの平均値

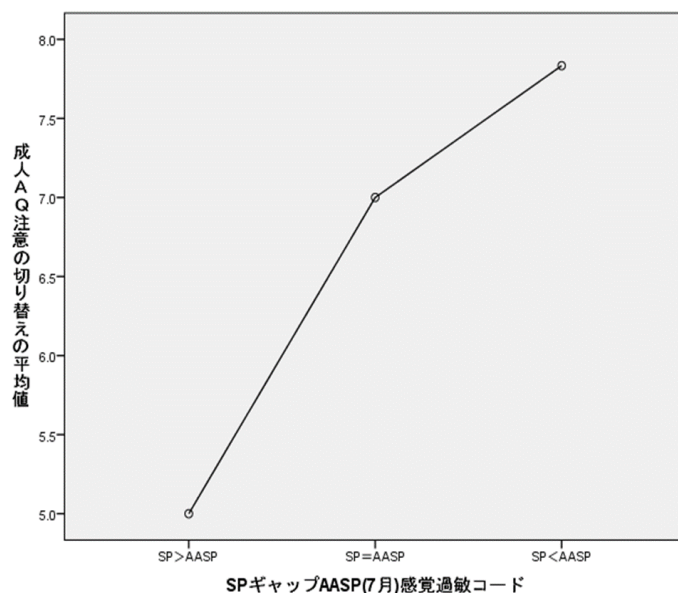


図.4 「感覚過敏」における SP/AASP のギャップと成人用 AQ 注意の切り替えの平均値

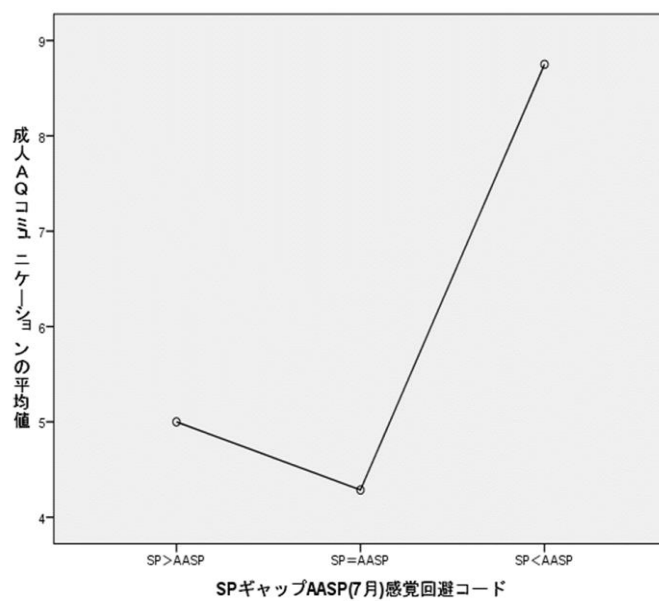


図.5 「感覚回避」における SP/AASP のギャップと成人用 AQ コミュニケーションの平均値

(3) SP/AASP のギャップと自尊感情との関係について

① SP/AASP のギャップと自尊感情尺度および学校での被受容感・被拒絶感との相関分析

AASP と SP の「低登録」の差と自尊感情において有意な正の相関 ( $\rho = .611, p < .05$ ) が認められた。AASP と SP の「感覚過敏」の差と学校での被受容感において有意な正の相関 ( $\rho = .579, p < .05$ ) が認められた。(表.13-1)

表. 13-1 SP/AASPのギャップとRB自尊感情および学校での被受容感・被拒絶感との相関						
			SPギャップ AASP (7月) 低 登録	SPギャップ AASP (7月) 感 覚探求	SPギャップ AASP (7月) 感 覚過敏	SPギャップ AASP (7月) 感 覚回避
Spearmanの ロー ( $\rho$ )	本人RB自尊 合計	相関係数	. 611*	0. 058	0. 305	0. 358
		有意確率 (両側)	0. 020	0. 844	0. 288	0. 209
		度数	14	14	14	14
	学校・被受 容感合計得 点	相関係数	0. 409	-0. 230	. 597*	0. 516
		有意確率 (両側)	0. 146	0. 428	0. 024	0. 059
		度数	14	14	14	14
	学校・被拒 絶感合計得 点	相関係数	-0. 191	0. 164	-0. 324	-0. 314
		有意確率 (両側)	0. 513	0. 575	0. 259	0. 274
		度数	14	14	14	14

\*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

②SP/AASP のギャップによる RB 自尊感情尺度、学校での被受容感・被拒絶感尺度の平均の分散分析

感覚異常の周囲の理解 (気づき) と ASD 本人の自己理解 (気づき) のギャップと自尊感情との関係を明らかにするため、SP と AASP (7 月) の各 4 象限ごとのギャップ 3 群間での RB 自尊感情得点の平均に差が見られるかを検討した。

- 1) コード 1 :  $SP > AASP$  (感覚異常に関して周囲の理解に比して ASD 本人の自己理解が乏しい群)
- 2) コード 2 :  $SP = AASP$  (感覚異常に関して周囲の理解と ASD 本人の自己理解が等しい群)
- 3) コード 3 :  $SP < AASP$  (感覚異常に関して ASD 本人の自己理解に比して周囲の理解が乏しい群)

(a)「低登録」におけるギャップ 3 群間の RB 自尊感情平均点の比較 (3 群間の分散分析) (表.13-2) と等分散性の検定 (表.13-3)

**表. 13-2 分散分析**

本人RB自尊 合計

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	222. 595	2	111. 298	4. 367	. 040
グループ内	280. 333	11	25. 485		
合計	502. 929	13			

**表. 13-3 等分散性の検定**

本人RB自尊 合計

Levene 統計量	自由度 1	自由度 2	有意確率
3. 363	2	11	. 073

(b) 「低登録」における SP/AASP のギャップと RB 自尊感情尺度の多重比較 (表.13-4)

表. 13-4 「低登録」におけるSP/AASPのギャップとRB自尊感情の多重比較							
従属変数: 本人RB自尊 合計							
	(I) SP ギャップ AASP (7月) 低 登録コード	(J) SP ギャップ AASP (7月) 低 登録コード	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
						下限	上限
Tukey HSD	SP> AASP	SP=AASP	7. 5	3. 57	0. 135	-2. 14	17. 14
		SP< AASP	9. 417*	3. 259	0. 036	0. 62	18. 22
	SP= AASP	SP> AASP	-7. 5	3. 57	0. 135	-17. 14	2. 14
		SP< AASP	1. 917	3. 259	0. 829	-6. 88	10. 72
	SP< AASP	SP> AASP	-9. 417*	3. 259	0. 036	-18. 22	-0. 62
		SP= AASP	-1. 917	3. 259	0. 829	-10. 72	6. 88
Bonferroni	SP> AASP	SP=AASP	7. 5	3. 57	0. 178	-2. 57	17. 57
		SP< AASP	9. 417*	3. 259	0. 044	0. 23	18. 61
	SP= AASP	SP> AASP	-7. 5	3. 57	0. 178	-17. 57	2. 57
		SP< AASP	1. 917	3. 259	1	-7. 27	11. 11
	SP< AASP	SP> AASP	-9. 417*	3. 259	0. 044	-18. 61	-0. 23
		SP= AASP	-1. 917	3. 259	1	-11. 11	7. 27
*. 平均値の差は 0. 05 水準で有意です。							

有意に ( $p=.036$ ) 「③<①」傾向が窺えた。なお、Kruskal Wallis 検定を行ったところ (表.13-5)、カイ 2 乗検定値 5.879、漸近有意確率.053 と有意傾向を示す同様の傾向が窺えた (表.13-6)

Kruskal Wallis 検定

表. 13-5 順位

	SPギャップAASP (7月) 低登録コード	
	ド	平均ランク
本人RB自尊 合計	SP > AASP	4
	SP = AASP	4
	SP < AASP	6
	合計	14

表. 13-6 検定統計量<sup>a, b</sup>

本人RB自尊 合計	
カイ 2 乗	5.879
自由度	2
漸近有意確率	.053

a. Kruskal Wallis 検定

b. グループ化変数: SPギャップAASP (7月)低登録コード

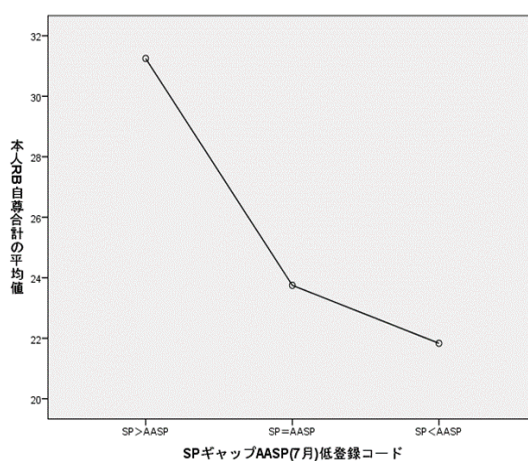


図.6 「低登録」における SP/AASP のギャップと RB 自尊感情の平均値

感覚異常の周囲の理解（気づき）と ASD 本人の自己理解（気づき）のギャップと学校での被受容感との関係を明らかにするため、SP と AASP（7 月）の各 4 象限ごとのギャップ 3 群間で学校での被受容感得点の平均に差が見られるかを検討した。

- 1) コード 1 : SP > AASP（感覚異常に関して周囲の理解に比して ASD 本人の自己理解が乏しい群）
- 2) コード 2 : SP = AASP（感覚異常に関して周囲の理解と ASD 本人の自己理解が等しい群）
- 3) コード 3 : SP < AASP（感覚異常に関して ASD 本人の自己理解に比して周囲の理解が乏しい群）

(c)「感覚過敏」におけるギャップ3群間の学校での被受容感平均点の比較(3群間の分散分析)(表.13-7)と等分散性の検定(表.13-8)

表. 13-7 分散分析

学校・被受容感合計得点

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	163. 657	2	81. 829	2. 785	. 105
グループ内	323. 200	11	29. 382		
合計	486. 857	13			

表. 13-8 等分散性の検定

学校・被受容感合計得点

Levene 統計量	自由度 1	自由度 2	有意確率
. 455	2	11	. 646

(d)「感覚過敏」における SP/AASP のギャップと学校での被受容感尺度の多重比較(表.13-9)

表. 13-9 「感覚過敏」における SP/AASP のギャップと学校での被受容感尺度の多重比較							
従属変数: 学校・被受容感合計得点							
	(I) SP ギャップ AASP (7月) 感 覚過敏コー ド	(J) SP ギャップ AASP (7月) 感 覚過敏コー ド	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
						下限	上限
Tukey HSD	SP > AASP	SP = AASP	3. 733	3. 959	0. 626	-6. 96	14. 42
		SP < AASP	7. 733	3. 282	0. 089	-1. 13	16. 6
	SP = AASP	SP > AASP	-3. 733	3. 959	0. 626	-14. 42	6. 96
		SP < AASP	4	3. 833	0. 566	-6. 35	14. 35
	SP < AASP	SP > AASP	-7. 733	3. 282	0. 089	-16. 6	1. 13
		SP = AASP	-4	3. 833	0. 566	-14. 35	6. 35
Bonferroni	SP > AASP	SP = AASP	3. 733	3. 959	1	-7. 43	14. 9
		SP < AASP	7. 733	3. 282	0. 114	-1. 52	16. 99
	SP = AASP	SP > AASP	-3. 733	3. 959	1	-14. 9	7. 43
		SP < AASP	4	3. 833	0. 957	-6. 81	14. 81
	SP < AASP	SP > AASP	-7. 733	3. 282	0. 114	-16. 99	1. 52
		SP = AASP	-4	3. 833	0. 957	-14. 81	6. 81

有意水準は満たさなかったものの、「①>③」傾向が窺えた。なお、Kruskal Wallis 検定を行ったところ、同様に有意傾向を示す傾向が窺えた。

Kruskal Wallis 検定

表. 13-10 順位

	SPギャップAASP(7月)感覚過敏コード		平均ランク
	コード	度数	
学校・被受容感合計得点	SP>AASP	5	10.20
	SP=AASP	3	7.67
	SP<AASP	6	5.17
	合計	14	

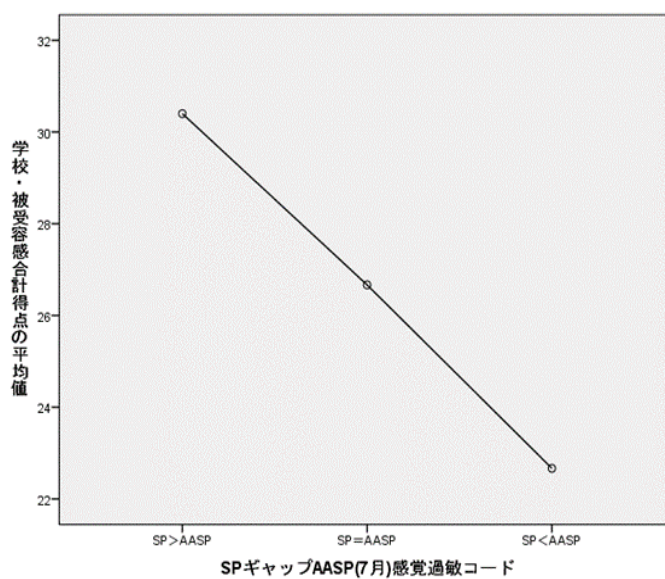


図.7 「感覚過敏」における SP/AASP のギャップと学校での被受容感尺度の平均値



7. 感覚特性を取り入れたグループ活動（感覚特性についての自己・他者理解プログラム）  
介入前後による変化

(1) 介入前後に実施した AASP の各象限の変化

① T 検定の結果（表.14-1）

表. 14-1 対応サンプルの統計量

		平均値	度数	標準偏差	平均値の標準誤差
ペア 1	AASP低登録7月	37.42	12	9.424	2.720
	AASP低登録9月	34.50	12	7.230	2.087
ペア 2	AASP感覚探求7月	37.25	12	6.341	1.830
	AASP感覚探求9月	34.67	12	5.944	1.716
ペア 3	AASP感覚過敏7月	40.83	12	9.262	2.674
	AASP感覚過敏9月	37.17	12	9.044	2.611
ペア 4	AASP感覚回避7月	39.92	12	6.973	2.013
	AASP感覚回避9月	37.33	12	8.637	2.493

②ノンパラメトリック検定の結果（表.14-2）

表. 14-2 記述統計								
	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	パーセンタイル		
						25	50（中央値）	75
AASP低登録7月	17	38.41	8.478	19	50	33	40	45
AASP感覚探求7月	17	37.71	6.101	27	48	32.5	38	43
AASP感覚過敏7月	17	40.53	9.063	26	59	33.5	40	46.5
AASP感覚回避7月	17	40.71	6.935	26	55	35.5	42	43
AASP低登録9月	14	35.86	7.745	24	49	28	37	40.25
AASP感覚探求9月	14	34.79	5.508	29	48	31.25	33.5	37
AASP感覚過敏9月	14	36.57	8.465	26	59	29.75	35.5	40.5
AASP感覚回避9月	14	37.21	7.973	26	60	33.75	36.5	39.25

③「介入前後」および「AASPにおける各象限」の2要因による分散分析（表.14-3）

表. 14-3 被験者内効果の検定

測定変数名: MEASURE\_1

ソース		タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
象限	球面性の仮定	197.198	3	65.733	1.110	.359
	Greenhouse-Geisser	197.198	2.227	88.536	1.110	.351
	Huynh-Feldt	197.198	2.819	69.960	1.110	.357
	下限	197.198	1.000	197.198	1.110	.315
誤差 (象限)	球面性の仮定	1953.677	33	59.202		
	Greenhouse-Geisser	1953.677	24.501	79.740		
	Huynh-Feldt	1953.677	31.006	63.009		
	下限	1953.677	11.000	177.607		
時間	球面性の仮定	207.094	1	207.094	10.056	.009
	Greenhouse-Geisser	207.094	1.000	207.094	10.056	.009
	Huynh-Feldt	207.094	1.000	207.094	10.056	.009
	下限	207.094	1.000	207.094	10.056	.009
誤差 (時間)	球面性の仮定	226.531	11	20.594		
	Greenhouse-Geisser	226.531	11.000	20.594		
	Huynh-Feldt	226.531	11.000	20.594		
	下限	226.531	11.000	20.594		
象限 * 時間	球面性の仮定	4.698	3	1.566	.176	.912
	Greenhouse-Geisser	4.698	2.379	1.975	.176	.873
	Huynh-Feldt	4.698	3.000	1.566	.176	.912
	下限	4.698	1.000	4.698	.176	.683
誤差 (象限x時間)	球面性の仮定	293.177	33	8.884		
	Greenhouse-Geisser	293.177	26.165	11.205		
	Huynh-Feldt	293.177	33.000	8.884		
	下限	293.177	11.000	26.652		

「時間（介入前後）」と「AASP における各 4 象限」の 2 要因による分散分析を行ったところ、「時間（介入前後）」間にのみ主効果が認められ（ $F(1,11)=10.056$ ,  $MSc=207.094$ ,  $p<.01$ ）、「AASP における各 4 象限」の主効果および両者の交互作用は認められなかった。よって、「AASP における各 4 象限」は、いずれも本介入により有意な減少を示したことがうかがえる。

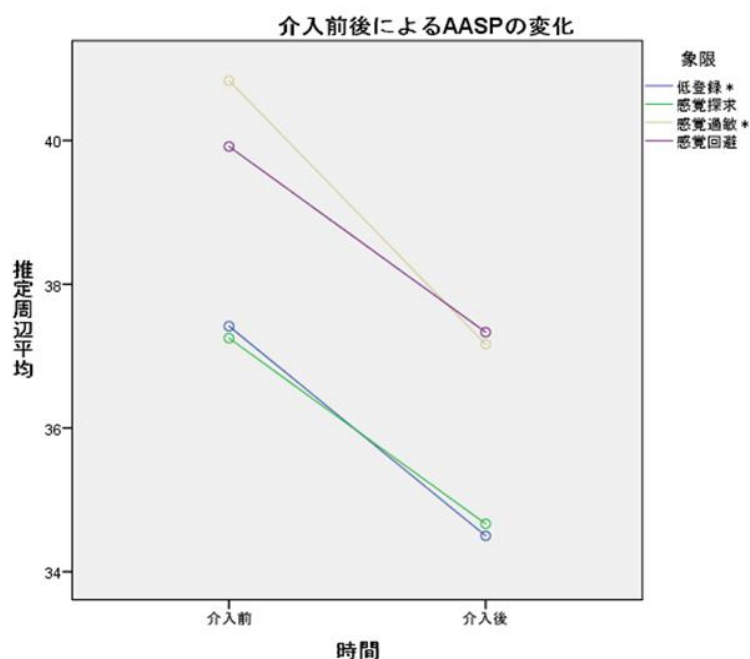


図.8 介入前後による AASP の変化

(2) 介入前後に実施した AASP の変化とグループ活動における仲間意識の関係について

① 介入前後に実施した AASP の変化と、グループにおける被受容感・被拒絶感およびグループ意識との相関分析

AASP(9月-7月)の「低登録」と G 対人関係において有意な負の相関( $\rho = -.773$ ,  $p<.01$ )が認められた。AASP (9月-7月)の「感覚過敏」とアスカ被拒絶感尺度において有意な正の相関( $\rho = .661$ ,  $p<.05$ )が認められた。(表.15-1)

表. 15-1 AASP（9月-7月）とグループにおける被受容感・被拒絶感およびグループ意識との相関

			アスカ被受 容感合計得 点	アスカ被拒 絶感合計得 点	G帰属意識	G対人関係	G魅力	Gリラックス 感	グループ意 識合計
Spearmanの ロー(ρ)	AASP低登録9 月-7月	相関係数	-0.454	0.532	0.600	-.773**	-0.600	-0.382	-0.174
		有意確率 (両側)	0.161	0.092	0.051	0.005	0.051	0.246	0.609
		度数	11	11	11	11	11	11	11
	AASP感覚探 求9月-7月	相関係数	-0.014	-0.222	0.230	-0.146	-0.146	-0.259	0.005
		有意確率 (両側)	0.968	0.511	0.495	0.669	0.669	0.442	0.989
		度数	11	11	11	11	11	11	11
	AASP感覚過 敏9月-7月	相関係数	-0.321	.661*	0.501	-0.109	-0.359	0.172	0.206
		有意確率 (両側)	0.336	0.027	0.116	0.750	0.278	0.613	0.543
		度数	11	11	11	11	11	11	11
	AASP感覚回 避9月-7月	相関係数	0.048	0.137	-0.076	-0.445	-0.326	-0.300	-0.390
		有意確率 (両側)	0.888	0.687	0.825	0.170	0.328	0.371	0.236
		度数	11	11	11	11	11	11	11

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

\*、相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

②介入前後に実施した AASP の強みによるグループにおける被受容感・被拒絶感尺度得点及び、グループ意識（対人関係尺度）の平均の分散分析

感覚異常に対する自己・他者理解プログラム介入前後による変化を明らかにするため、AASP における各 4 象限の得点の変化を、以下の 3 群にコード化し分散分析を行った。

- ① コード 1：9 月の AASP 得点 > 7 月の AASP 得点（ASD 本人の感覚異常への気づきが増加した群）
- ② コード 2：9 月の AASP 得点 = 7 月の AASP 得点（ASD 本人の感覚異常への気づきが変わらなかった群）
- ③ コード 3：9 月の AASP 得点 < 7 月の AASP 得点（ASD 本人の感覚異常への気づきが減少した群）

- (a) 感覚特性に対する自己・他者理解プログラム介入前後による、アスカの会被受容/被拒絶感得点の分散分析の結果（表.15-2）

表.15-2 自己・他者理解プログラム介入前後による、アスカの会被受容/被拒絶感得点の分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
アスカ被受容感合計得点	グループ間	56.545	2	28.273	.983	.415
	グループ内	230.000	8	28.750		
	合計	286.545	10			
アスカ被拒絶感合計得点	グループ間	73.352	2	36.676	.974	.418
	グループ内	301.375	8	37.672		
	合計	374.727	10			

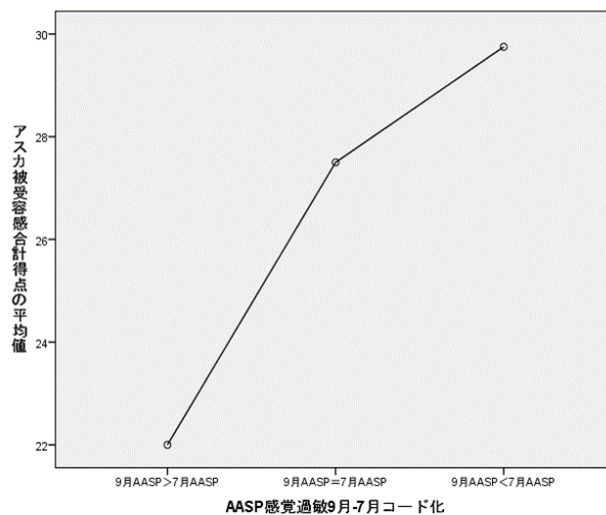


図.9 プログラム入前後による AASP の得点とアスカの会被受容得点平均値の変化

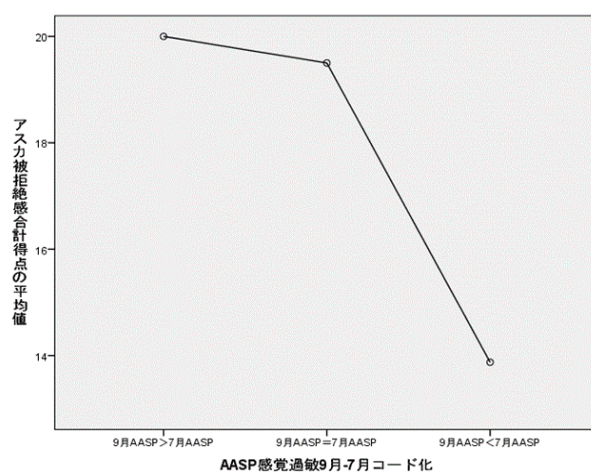


図.10 プログラム入前後による AASP の得点とアスカの会被拒絶感得点平均値の変化

(b) 感覚特性に対する自己・他者理解プログラム介入前後による、アスカの会でのグループ内の対人関係得点の分散分析の結果（表.15-3）

表.15-3 自己・他者理解プログラム介入前後による、アスカの会でのグループ内の対人関係得点の分散分析

G対人関係

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	5.186	1	5.186	4.044	.075
グループ内	11.542	9	1.282		
合計	16.727	10			

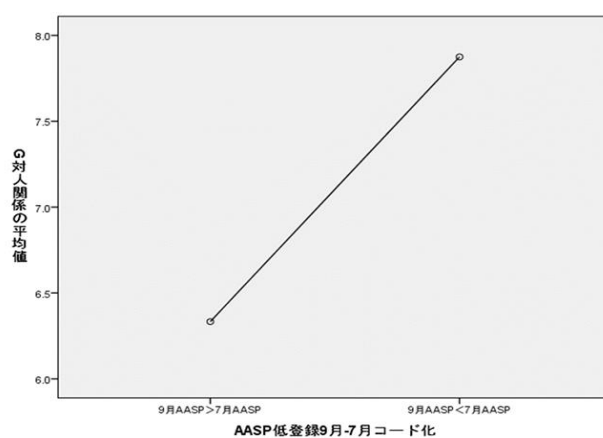


図.11 プログラム入前後による AASP の得点とアスカの会 G 対人関係平均値の変化

## V. 考察

### 1. 感覚特性と年齢/知的水準との相関についての考察

養育者が自身の子どもの「低登録」の特性があることを把握している場合は、子どもの年齢も低くなることが示唆された。子どもの年齢が低いと、養育者は子どもをよく観察しており、「低登録」が最も養育者にとって気付きやすい感覚特性であると考えられる。

### 2. 感覚特性と発達特性との相関についての考察

養育者から見て、子どもに「低登録」の特徴がみられる見られる場合、ADHD 不注意傾向であることが示唆された。感覚に鈍感であるために、子どもは周囲の変化にも気づかず、不注意になってしまうことが考えられる。同じように「感覚過敏」と「感覚回避」の特徴を子どもが有している場合、感覚の過敏性から周囲の変化に気を取られたり、感覚に過敏なことで回避行動に気を取られることにより、不注意になってしまうと考えられる。

子どもが「感覚探求」の特徴を有していると、注意の切り替えや細部への注意、コミュニケーションにおいて困難さがみられることが示唆された。「感覚探求」は閾値が高いために、より多くの刺激を求め、それに集中してしまい注意の切り替えや細部に注意を向けることが難しいことが考えられる。また、感覚を必要以上に求める姿が、他者には異質な存在に感じられ、コミュニケーションを含む他者との関係の構築が困難になることが考えられる。「感覚過敏」「感覚回避」においても、過敏性により環境に圧倒され、それ故に回避行動に集中してしまい、細部に注意を向けることが難しくなると考えられる。また、「感覚回避」を有していると、回避行動をすることにより、周囲から誤解をされてしまい、それにより周囲とコミュニケーションを取ることが難しくなることが考えられる。

### 3. 感覚特性と養育態度との関連についての考察

子どもが「低登録」であると、養育者は子どもを溺愛する傾向にあることが示唆された。「低登録」の場合、なかなか感覚が入ってこないため、怪我をしたり、服が汚れていても本人は気づいていないなどの状況が想定される。そのため、養育者は子どもに対して“私がいなくては”と感じ、それが溺愛に繋がるのではないかと思われる。また、「感覚過敏」や「感覚回避」においても、「低登録」と同様に、養育者は子どもを溺愛する傾向にあることが示唆され、「感覚回避」の場合は、干渉的であることも示唆された。小さな刺激に対しても敏感に反応する様子や、回避行動をとる様子を養育者は見ているため、“守ってあげたい”と感じるのではないだろうか。しかし、「感覚探求」においては、養育者は子どもに対して厳格で、子どもを非難する傾向にあることが示唆された。「感覚探求」は感覚

が入ってこないために、周囲の人間と同じ量の感覚には反応しないので、必要以上に物や人を触ったり、匂いを嗅いだりするなどの特徴があり、その様子は、たとえ養育者であっても受け入れられない感覚の特性であると考えられる。

#### 4. 感覚特性と二次障害との関連についての考察

子どもが「低登録」の特徴を有していると、不安や抑うつ、身体愁訴を訴えやすいことが示唆された。「低登録」の場合は、本人がストレスを感じやすいことも示唆されており、ストレスが関係していると考えられる。「感覚過敏」「感覚回避」の場合、閾値が低く周囲の環境に圧倒されてしまい、様々な場面で不安を感じ、それにより身体愁訴を訴えやすいことが考えられる。また、簡単に様々な刺激が入ってきてしまう辛さから、周囲に対して攻撃的になってしまうことも考えられる。全問題尺度の得点が「感覚過敏」「感覚回避」において高いことから、「感覚過敏」「感覚回避」は他の2象限より、問題行動を起こしやすいため、環境に馴染むことが困難であると考えられる。

#### 5. 養育者が捉える感覚特性と本人が捉える感覚特性についての考察

AASP では子どもが自身の「低登録」を把握していると、「感覚過敏」や「感覚回避」も把握していることが示唆された。また、「感覚過敏」を把握している場合は、「感覚回避」も把握していることが示唆された。先行研究にもある通り、閾値が高い感覚特性や閾値が低い感覚特性も同時に混在していると考えられる。また、「感覚過敏」があることにより、「感覚回避」が生じると考えられる。

SP と AASP に相関が認められなかったことに関しては、年齢と SP の4象限との相関にもあるように、養育者の感覚特性に対する気づきが子どもの年齢に左右されていることから、養育者の回答より、子どもの方が、より自身の感覚特性を把握していると思われる。

#### 6. 養育者が捉える感覚特性と本人が捉える感覚特性とのギャップとストレス及び発達特性、自尊感情についての考察

##### (1) 養育者が捉える感覚特性と本人が捉える感覚特性とのギャップとストレスについての考察

SP/AASP の「低登録」にズレがある場合に、子どもはストレスを感じていることが示唆された。「低登録」に関しては、本人は自身の感覚特性を理解しているが、周囲が感覚の特性を理解しないことにより、本人はストレスを感じると考えられる。

##### (2) 養育者が捉える感覚特性と本人が捉える感覚特性とのギャップと発達特性についての考察



SP/AASP の「低登録」にズレがある場合に、本人は社会的なスキルに対して困難さを感じていることが示唆された。「低登録」は、感覚がなかなか入ってこないため、周囲の情報を聞き逃してしまい、社会的なスキルが身につかないことが考えられる。SP/AASP の「感覚過敏」にズレがある場合は、「低登録」と同様に、社会的スキルに対する困難さを有しており、それに加え注意の切り替えに対しても困難さがあることが示唆された。感覚に過敏があることで、様々な情報が入ってきてしまう辛さに加え、(表.3) にもあるように、養育者が子どもを溺愛し、子どもに盲従することにより、子どもはわがままになることが考えられる。SP/AASP の「感覚過敏」にズレがある場合に、本人は注意の切り替えに対して困難さを感じていることが示唆された。「感覚過敏」を有していることにより、様々な刺激から逃れるための回避行動に集中し、それにより注意の切り替えが難しくなるのではないかと考えられる。また、SP の対比において、ギャップは ADHD-RS や CDC とは相関が認められず、ASD 傾向にのみに有意な相関を示したことから、ギャップは ASD の特性の 1 つであると考えられる。

### (3) 養育者が捉える感覚特性と本人が捉える感覚特性とのギャップと RB 自尊感情尺度及び学校での被受容感・被拒絶感についての考察

SP/AASP の「低登録」にズレがある場合に、自尊感情も低下することが示唆された。また、周囲の方が本人より感覚特性を把握することにより、自尊感情が低下することが示唆された。自身の「低登録」を周囲に注意され、自尊感情が低下してしまうように思われる。SP/AASP の「感覚過敏」にズレが生じる場合に、学校で受け入れられていないと感じる傾向にあることが示唆された。「低登録」と同様に、周囲の方が本人より感覚特性を把握することにより、学校で受け入れられていると感じないことが示唆された。自身の「感覚過敏」を周囲に注意され、「感覚過敏」があるために、周囲から距離を置かれることにより、自尊感情が低下してしまうように思われる。

「低登録」において、養育者より本人が自身の感覚特性を理解している場合に、最も自尊感情が低くなることが示唆された。また、「感覚過敏」においても、養育者に比べて、子どもの方が自身の感覚特性を把握している場合に、学校での被受容感が低くなる傾向が見られた。

### 7. 感覚特性を取り入れたグループ活動（感覚特性についての自己・他者理解プログラム）介入前後の変化についての考察

「低登録」において、7 月に実施した時の方がグループ内での対人関係の得点が高く、また、9 月に実施した時の方が、グループ内での拒絶感の得点が下がったことから、感覚異常というテーマでの心理教育や、2 人 1 組での話し合いは、感覚異常のある ASD 児・者にとって有意なプログラムであったことが推察される。また、「低登録」「感覚探求」「感覚過敏」「感覚回避」の全てにおいて、9 月の AASP の得点が下がったことに関しては、全ての象限

に加え、アスカの会の被拒絶感の得点も下がっていることから、“感覚の特性は自分以外の他者にも存在する”ことを知り、今までより自身の感覚特性をポジティブに捉えることができたのではないかと考えられる。また、「低登録」と「感覚過敏」の AASP 得点が有意な減少を示したことから、「低登録」と「感覚過敏」に対する一定の効果が確認できた。よって、プログラムに感覚特性を取り入れることで、本プログラムの目的である仲間意識の向上に貢献したと考えられる。

## 8.総合考察

感覚異常、特に「低登録」がある場合に、本人はストレスを感じることが明らかになった。そして、「低登録」を有している場合は、養育者から見て子どもは不安や抑うつ、身体愁訴を訴えやすく、また、「感覚過敏」や「感覚回避」を有している場合は、子どもは身体愁訴を訴えることが明らかになった。また、「感覚過敏」や「感覚回避」を有していると、子どもは攻撃的になることも明らかになった。感覚異常があることにより、子どもはストレスを感じ、不安感や抑うつ感も感じていることが明らかになった。また、攻撃的にならざるを得ないほどに、「感覚過敏」や「感覚回避」は本人にとっては辛いものであると考えられる。また、「低登録」において、SP と AASP の間に認識のズレが生じると、子どもはストレスを感じていることが明らかになった。たとえ「低登録」であっても、子どもは「低登録」であると認識しており、本人が自身の感覚鈍麻に気づいているのにも関わらず、周囲が感覚特性に気づかない、周囲に理解をして貰えないことが多く、それが「低登録」を有する者にとっては、ストレスになることが考えられる。また、「低登録」を有しており、そのことに養育者より本人の方が気づいている場合は、自尊感情の得点が下がった。「感覚過敏」においても、「感覚過敏」に対する気づきが、養育者より本人の方が大きい場合に、学校での被受容感の得点が下がった。つまり、本人より養育者の方が、子どもの感覚特性を把握しており、子どもにとって、“自分の感覚特性が周囲に理解されている”という体験は、「低登録」や「感覚過敏」を有する者にとって、自尊感情や学校での被受容感を上げることに繋がると考えられる。

感覚異常のプログラムを行うことにより、“自分の感覚特性は自分だけにあるのではない”と感じ、仲間意識が芽生えたと思われる。また、「低登録」「感覚探求」「感覚過敏」「感覚回避」の全ての象限において、感覚特性に対する気づきが9月実施より、7月実施の方が大きかったが、同時に9月実施の方が被拒絶感得点も下がっており、自身の感覚特性をポジティブに捉えることが可能になったとも考えられる。

感覚異常は、あくまでも個人の感覚の問題であり、たとえ本人が自身の感覚特性を把握していたとしても、周囲の人間が当事者の感覚特性を完璧に把握することは難しい。感覚特性に対する本人の気づきが、養育者の気づきより大きいことが、本人にとっては辛いと考えられる。つまり、感覚特性に対する周囲の理解が、感覚異常を有する者にとって大切であり、心の安定にも繋がると思われる。このことから、感覚異常に対して、本人のみならず、周囲

の人間も当事者の感覚特性を理解することが、感覚異常を訴える者を支える方法の 1 つであると思われる。

## VI.引用・参考文献

- 1.綾屋紗月、熊谷晋一郎（2008）『発達障害ゆっくりていねいにつなりたい当事者研究』  
医学書院
- 2.稲福繁、伊藤真理、早川徳香、井脇貴子、鈴木朋子、船崎康広、吉田敬（2013）自閉  
症スペクトラム障害における聴覚過敏 健康医療科学研究 第3号 PP1-7
- 3.伊勢由佳利、北口勝也、十一元三（2015）自閉症スペクトラム傾向とストレスコーピング  
の関連—効果的なストレスマネジメントを目指して— 教育学研究論集 10、9-16
- 4.井手正和（2018）感覚過敏の神経生理過程が明かす自閉スペクトラム症者の感覚経験  
国立障害者リハビリテーションセンター研究所 2018年度日本認知科学会第35回大会
- 5.岩永竜一郎（2018）感覚特異性に対しての作業療法—感覚プロファイルから、感覚過敏/  
過鈍への対応を考える—AspHeart 特定非営利活動法人アスペ・エルデの会 3月号  
Vol.47 P34-38
- 6.梅田安沙子（2018）事例で学ぶ感覚特異性のアセスメントと支援 学齢期—感覚プロファ  
イルから、感覚過敏/過鈍への対応を考える—AspHeart 特定非営利活動法人アスペ・エルデ  
の会 3月号 Vol.47
- 7.岡本百合、三宅典恵、永澤一恵、香川芙美、矢式寿子、磯部典子、黄正国、池田龍也、  
二本松美里、吉原正治（2018）レジリエンスの視点から自閉症スペクトラム特性を持つ  
学生の支援を考える 総合保険科学：広島大学保健管理センター研究論文集  
Vol.34,21-28
- 8.二本松美里、吉原正治（2018）レジリエンスの視点から自閉症スペクトラム特性を持つ学  
生の支援を考える 総合保険科学：広島大学保健管理センター研究論文集 Vol.34,21-28
- 9.熊谷高幸（2017）『自閉症と感覚過敏』 新曜社

- 10.高橋智、増渕美穂（2008）アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍麻」の実態と支援に関する研究：本人へのニーズ調査から 東京学芸大学紀要.総合教育科学系、59：287-310
- 11.辻富彦（2018）自閉スペクトラムなどにおける聴覚過敏についてー保護者に対するアンケート調査と文献的考察 つじ耳鼻咽喉科クリニック 日耳鼻 121：679－678
- 12.辻井正次（2015）日本版青年・成人感覚プロファイル AASP ユーザーマニュアル
- 13.辻井正次（2015）日本版感覚プロファイル SP ユーザーマニュアル
- 14.辻井正次（2018）感覚の過敏さや過鈍さで日常生活に困難がある当事者と家族のためにー感覚プロファイルから、感覚過敏/過鈍への対応を考えるー AspHeart 特定非営利活動法人アスペ・エルデの会 3月号 Vol.47 P4－8
- 15.徳永瑛子（2018）事例で学ぶ感覚特異性のアセスメントと支援 幼児期ー感覚プロファイルから、感覚過敏/過鈍への対応を考えるーAspHeart 特定非営利活動法人アスペ・エルデの会 3月号 Vol.47 P16－22
- 16.橋本佳奈（2018）事例で学ぶ感覚特異性のアセスメントと支援 青年・成人期ー感覚プロファイルから、感覚過敏/過鈍への対応を考えるーAspHeart 特定非営利活動法人アスペ・エルデの会 3月号 Vol.47 P28－32
- 17.ブルスアルハ（2015）『発達凸凹なボクの世界ー感覚過敏を探求するー』 ゆまに書房
- 18.信吉真璃奈、高岡佑壮、矢野玲奈（2015）感覚過敏に困り感を持つ発達障害児・者への支援の現状と課題 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース下山研究室
- 19.森戸雅子、小田桐早苗、岩藤百香、三上史哲、宮崎仁、難波知子、武井祐子（2017）自閉スペクトラム障害児の感覚特性に着目した家族支援 川崎医療福祉学会誌 Vol.27 No. 1 13-25

## VII謝辞

この修士論文を作成するにあたりご多忙の中、テーマの決定から論文の作成、執筆に至るまで御指導・御助言をして頂きました櫻井教授に心より感謝致します。また、私のプログラムに参加して下さった A 県高機能自閉症児者の会のメンバーの方々に心から感謝するとともに、これからの御活躍を祈っております。